

第3章 光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

光中学校武道館の新営が、光構内の南端部に位置するプールの東側に計画された。埋蔵文化財資料館運営委員会の判断により、埋蔵文化財資料館が平成3年12月2日から13日まで試掘調査を実施した。調査の詳細は、年報XIで報告を行っているが概略を再録しておく。

試掘調査は新営予定地の中央部に新営建物の長軸に沿って、幅約1.5m、長さ約25mのトレンチを設定して行った。地山である黄褐色砂を遺構検出面とする土壌2基、溝状遺構1条、柱穴状遺構1基が検出された。これらの遺構から遺物の出土はなく、時期決定を行うことはできなかった。遺物はこの遺構面より上位に堆積する木炭を含んだ暗褐色砂などから出土している。遺物には、土師器・瓦質土器・国産陶磁器などがある。以上のことより、本調査区には古代～中世の遺物包含層・遺構が埋存していることが明らかになった。

この試掘調査の結果を受けて、埋蔵文化財資料館運営委員会で協議を行った。その結果、新営工事に先だち予定地約500㎡について、事前に発掘調査を実施することになった。発掘調査は、埋蔵文化財資料館が平成4年1月11日から2月12日にかけて実施した。

2. 層位 (Fig.29・30, PL.24)

当調査区の基本層序は、次の順である。

第I a層：明黄灰色砂質土

第I b層：黄灰色砂質土

第II層：暗茶灰色粘土

第III層：茶灰色粘質土

第IV層：明茶灰色砂（包含層1）

第V層：暗褐色砂（包含層2）

第VI層：暗褐色灰色砂（包含層3）

第VII層：淡灰黄色砂（地山）

第I a・I b層は表土層で厚さは10～20cmである。第II・III層の堆積は、旧山口県女子師範学校の建築と使用時の攪乱によって、東側にしか残っていない。

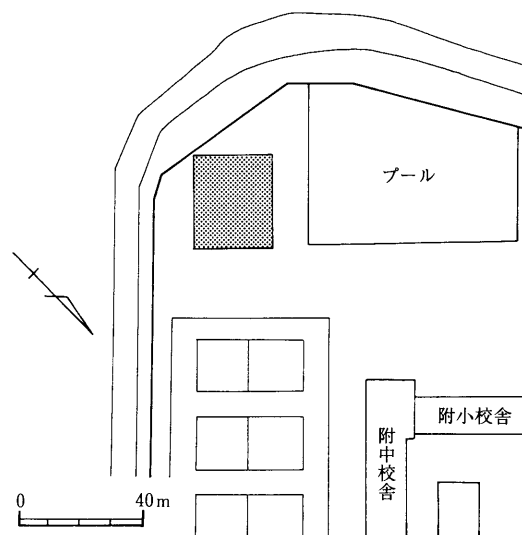


Fig. 28 調査区位置図

光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査

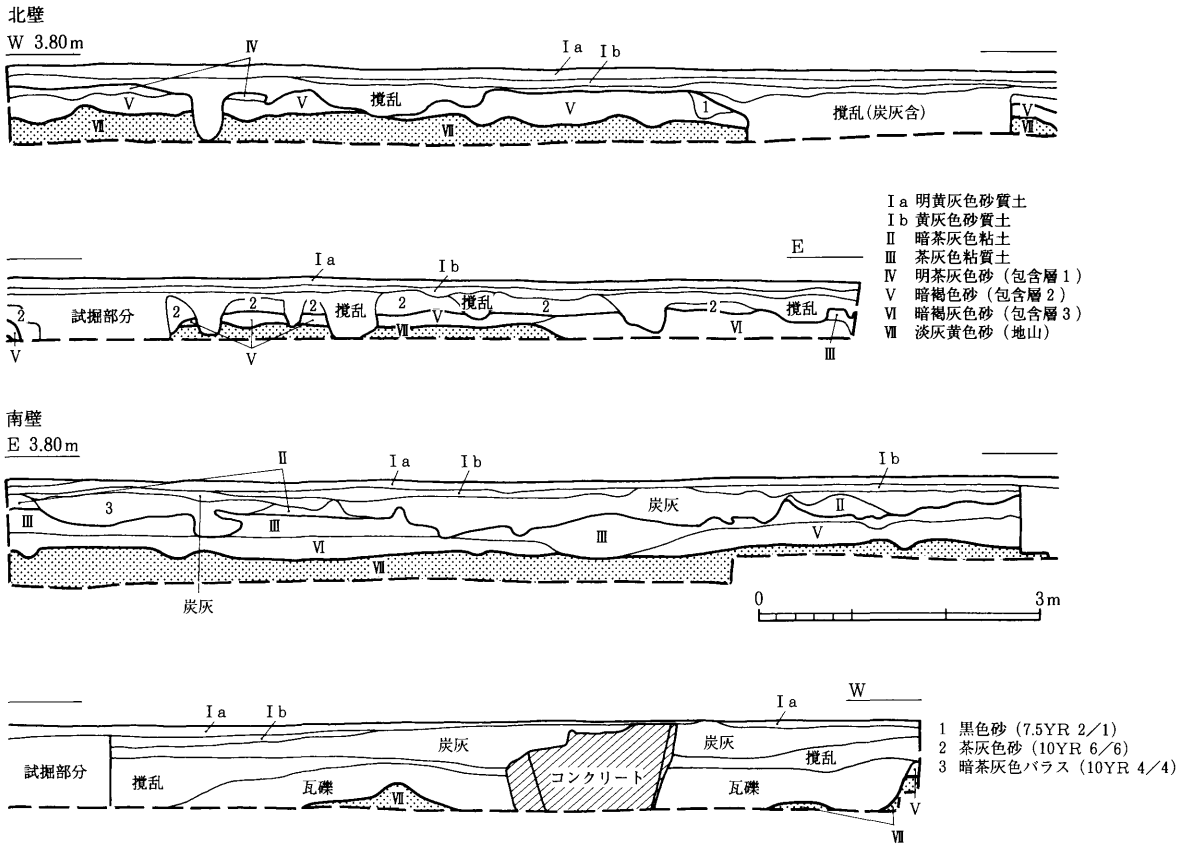


Fig. 29 調査区北壁・南壁土層断面図

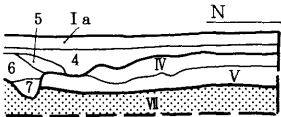
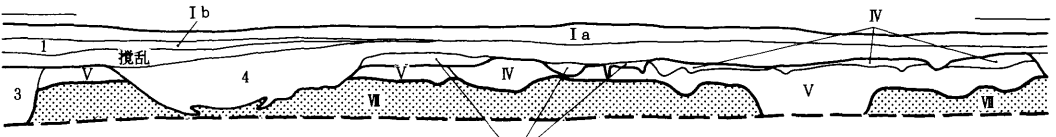
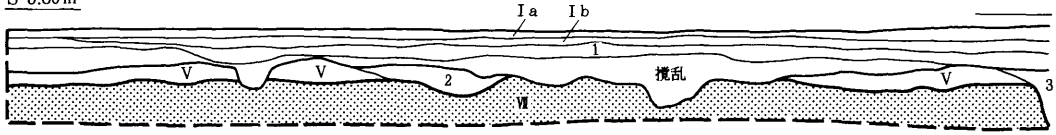
この東側の第Ⅱ層・第Ⅲ層に対応するレベルでの西側の土層は、炭灰及びコンクリートを含んだ暗褐色灰色粘質土の攪乱層である。攪乱のため明かにしえないが、西側は峨嵋山に寄った東側の第Ⅱ層・第Ⅲ層とは異なる土層堆積であった可能性が十分にある。

第Ⅳ層は中世～近世の遺物を包含している。調査区西側のみの堆積である。第Ⅴ層もまた西側のみに堆積する縄文～中世の遺物包含層であるが、この層の上面が第1遺構検出面となる。第Ⅵ層は第Ⅴ層よりも下位の堆積層と考えられるが、峨嵋山よりの東側のみに堆積がみられ、西側に堆積は認められない。第Ⅴ層と第Ⅵ層は、それぞれ供給地の異なった同時堆積である可能性も残されている。これら第Ⅴ・Ⅵ層の下、第Ⅶ層地山の上面が第2遺構検出面である。

層位

西壁

S 3.80m



- | | |
|------------------|---------------------------|
| I a 明黄灰色砂質土 | 1 暗灰褐色粘質土 (2.5Y 5/1) |
| I b 黄灰色砂質土 | 2 黒色砂 (7.5YR 2/1) |
| II 暗茶灰色粘土 | 3 暗褐色砂 (10YR 4/4) |
| III 茶灰色粘質土 | 4 暗茶灰色粘質土 (10YR 5/2) |
| IV 明茶灰色砂 (包含層1) | 5 IV層+黒灰色砂 |
| V 暗褐色砂 (包含層2) | 6 黒褐色砂 (10YR 黒褐3/1) |
| VI 暗褐色灰色砂 (包含層3) | 7 暗茶灰色パラス |
| VII 淡灰黄色砂 (地山) | 8 II層+暗青灰色粘土混じり (10G 6/1) |
| | 9 |

東壁

N 3.80m

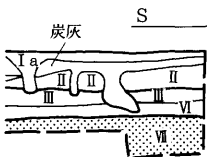
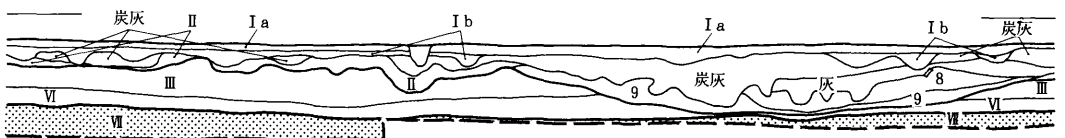
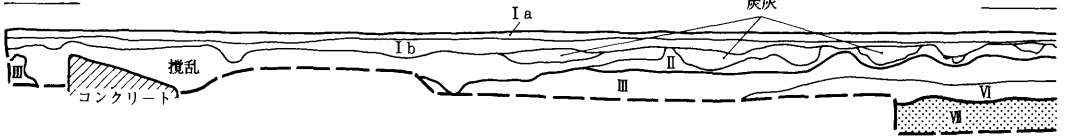


Fig. 30 調査区西壁・東壁土層断面図

3. 第2遺構面（第Ⅶ層上面）の遺構・遺物（Fig.31, PL.25）

本節では、第Ⅶ層：淡灰黄色砂（地山）の上面で検出された、遺構・遺物について記述を行う。なお、この第Ⅶ層上面は第2遺構面とし、上層である第Ⅴ層上面の遺構検出面を第1遺構面とする。

当調査地は試掘調査のデーターから、旧山口県女子師範学校により大規模な攪乱を受けていることが、ある程度予想されていた。しかし、表土層を重機によって除去した時点で、調査区の東半分を中心として、予想以上の攪乱を受けていることが判明した。このことにより、調査の重点は比較的攪乱の少なかった西半分におかれた。

調査区西半の第1遺構面を検出した時点で、確認のため南半攪乱部分に観察トレンチを設定した。南壁に沿う長さ8m、幅1mの観察トレンチ1と、東壁に沿う長さ12m、幅1mの観察トレンチ2の2カ所である。観察トレンチ1・2ともに、一部包含層（第Ⅵ層：暗褐灰色砂）の残存が認められた。ただし、観察トレンチ1の地点は攪乱が激しく、遺物の包含状況は希薄であった。これに対して、観察トレンチ2では比較的良好的な状況での遺物の包含が認められた。そこで、残存する包含層を追って、観察トレンチ2の西側を3.2m×6.0mに拡張した。その結果、第Ⅶ層上面を検出面として炭灰の充填した不整円形の土壙（第23号土壙）と、土壙周辺に散らばる古墳時代の須恵器・土師器を検出した。調査区西半においても、第1遺構面の下層に第Ⅶ層上面を検出面とする遺構が検出された。これらを同一遺構面のものと判断し、第2遺構面上の遺構として一括する。

第2遺構面の基盤となる第Ⅶ層は、調査区の全域で確認される。第Ⅶ層の上面は、調査区西側から東側に向かって傾斜している。西壁で標高約3.1m、東壁で標高約2.8mを測り、約30cmの比高差がある。また、第Ⅶ層の土質は一定ではなく、海側に面した調査区北半に行くにしたがって、小石が多く混入する。この第Ⅶ層上面を遺構面として検出された遺構は、土壙4基に柱穴6基である。なお、第2遺構面上の遺構番号は、頭に20をつけることによって、第1遺構面上の遺構番号と区別することとする。これらの遺構で、遺物が出土したのは、第22・23・24号土壙のわずか3基のみである。第22号土壙から前期縄文土器の小片が出土した他は、第23・24号土壙ともに古墳時代後期の土器が出土している。また、第Ⅶ層上面に張り付くようにして、第23号土壙周辺に散らばっていた土器群も古墳時代後期に属するものであった。第Ⅶ層の上部に堆積した第Ⅴ・Ⅵ層は、縄文土器・古墳時代の須恵器と土師器・中世土器を包含していた。これらのことより、第2遺構面が古墳時代後期以前の遺構検出面になると考えられる。

第2遺構面（第Ⅶ層上面）の遺構・遺物

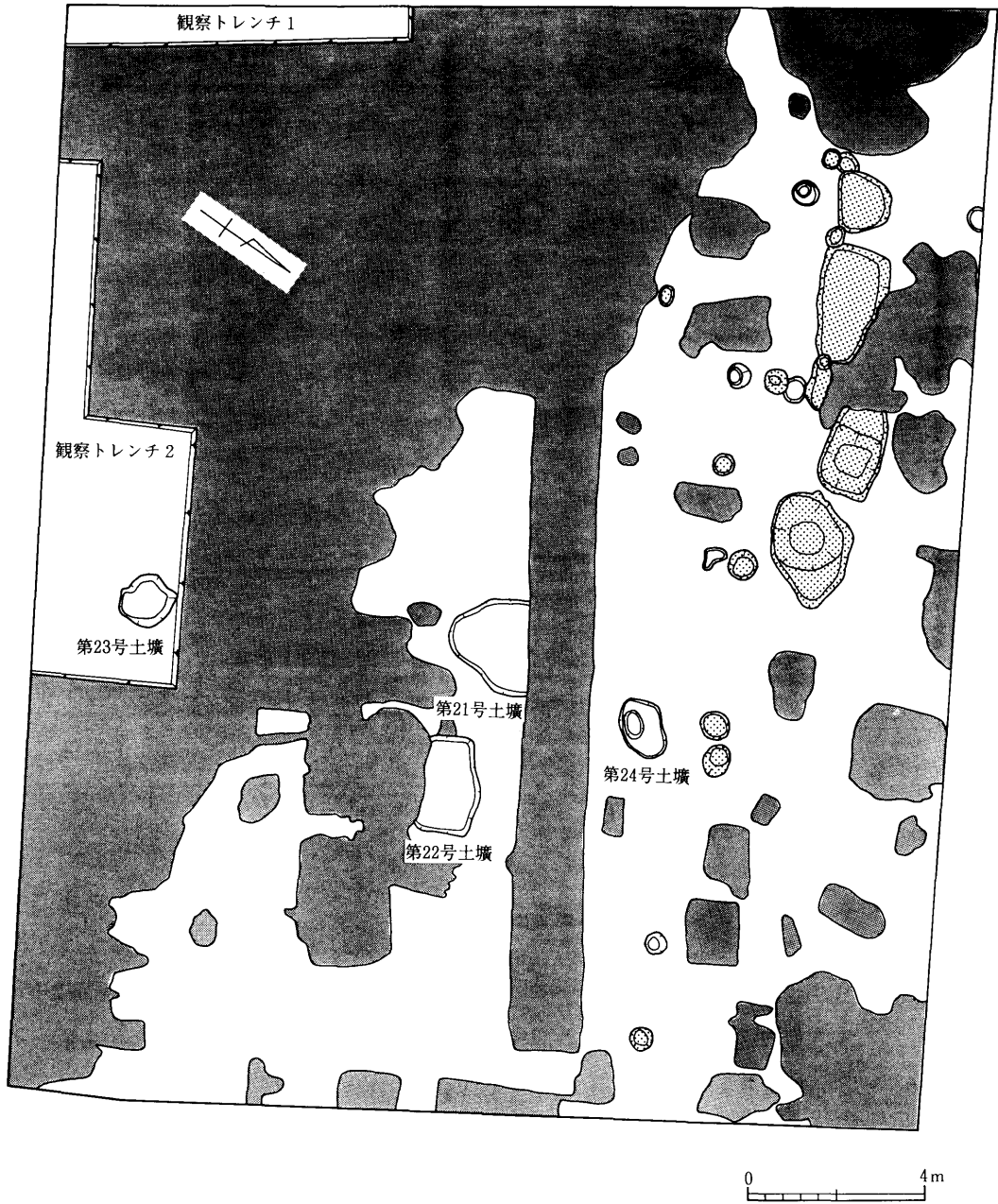


Fig. 31 第2遺構面遺構配置図

アミ目 大 第1遺構面遺跡
小 攪乱

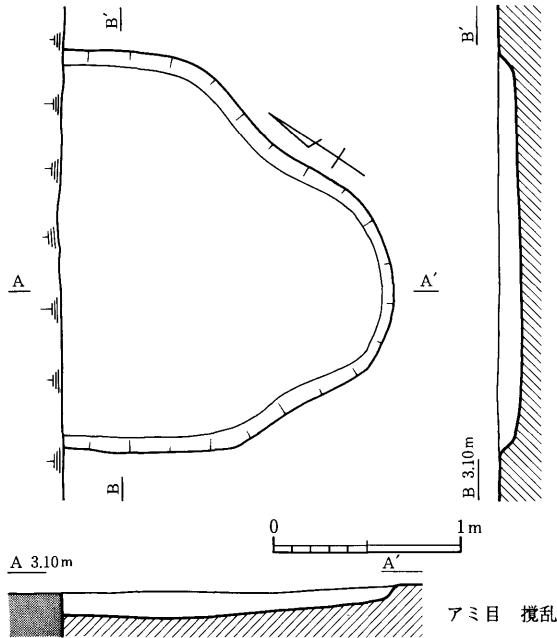


Fig. 32 第21号土壙実測図

第21号土壙 (Fig.32, PL.26)

調査区の中央部、平成3年度トレンチの南側に位置する土壙である。土壙の北側が平成3年度トレンチにかかるが、平成3年度の試掘調査では検出されていない。

平面形は浅い皿状を呈し、長軸210cm、短軸176cm以上の規模をもつ。検出面からの深さは13cmである。検出面の標高は約3.00m、底面標高は約2.87mである。長軸方向は西南-東北。

埋土は、上層の第V層と同じ暗褐色砂である。出土遺物はなく、平成3年度調査で検出されなかったことから上層の染み込みの可能性もある。

第22号土壙 (Fig.33, PL.26)

調査区の中央部、第21号土壙の東側に位置する。土壙の北側は攪乱によって削られているため、平面形態は明かではないが現状では長方形を呈する。長軸210cm、短軸120cm以上の規模をもつ。深さは、検出面から7cmである。検出面の標高は約3.00m、底面の標高は約2.93mである。長軸方向は、西南-東北。

第21号土壙と同様に暗褐色砂の埋土であり、上層からの染み込みかとも考えられる。ただし、埋土中より小片の前期縄文土器が数片出土しており、第21号土壙とともに縄文時代前期に遡る遺構の可能性も残されている。

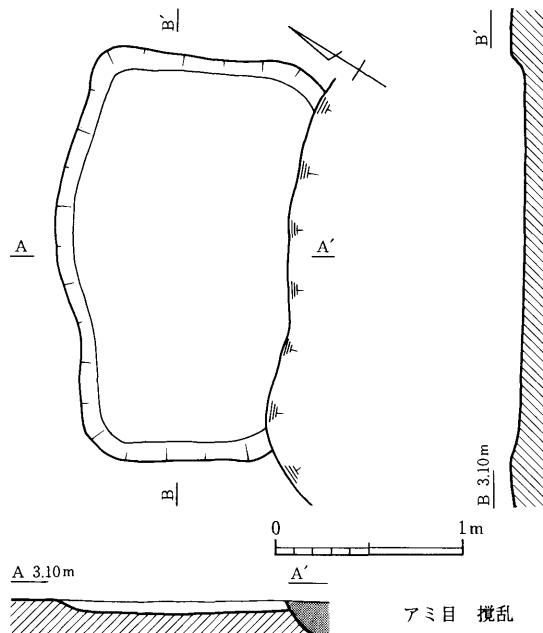


Fig. 33 第22号土壙実測図

第2遺構面（第Ⅶ層上面）の遺構・遺物

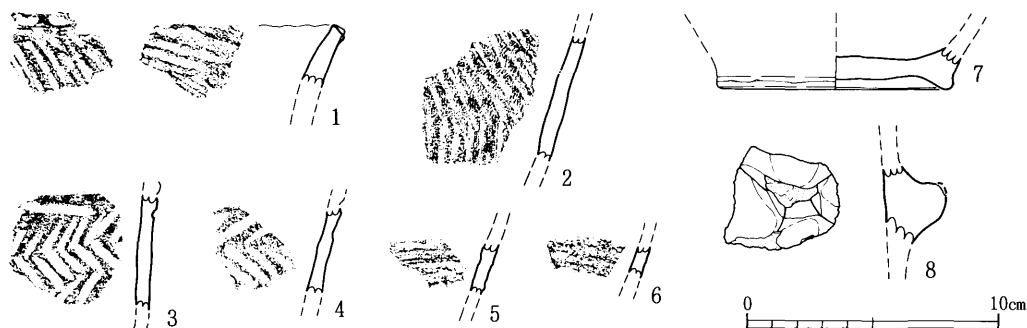


Fig. 34 第22号土壌及び調査区出土縄文土器実測図

第22号土壌及び調査区出土縄文土器 (Fig.34-1~8, PL.31)

遺構に伴ったのは、第22号土壌出土の4と第3号土壌出土の5のみである。このうち、第3号土壌は中世の遺物を包含した第Ⅴ層上面を遺構検出面としており、5の縄文土器は混入品である。第Ⅴ層から出土した1~3・6のうち、1~3は第22号土壌出土の4と保存状況・色調などが良く似ている。型式も同じ縄文時代前期の曾畑系であり、第22号土壌に関連した遺物である公算が強い。

1は深鉢形土器の口縁部片である。外反する口縁部の端面を面取りし、貝殻で上面を押圧する。内外面ともに、2枚貝による条痕が施される。外面は左に傾斜する縦位の条痕である。胎土は2~4mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。第Ⅴ層出土。2は深鉢形土器の胴部下半片である。外面には縦条痕が上下で施文方向をかえて切り合い、横羽状文を呈する。条痕は2枚貝による。内面の調整はケズリである。胎土は2~4mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。第Ⅴ層出土。3は深鉢形土器の胴部上半片である。外面は横線の下に横羽状文を施している。内面の調整はケズリである。胎土は2~4mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。外面には土中の鉄分により、砂が付着する。第Ⅴ層出土。4は深鉢形土器の胴部上半片である。外面には羽状文が施される。胎土は2~4mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。外面には土中の鉄分により、砂が付着する。第22号土壌出土。5は外面に横位の条痕、内面にケズリの調整をもつ小片。胎土は1~2mmの石英粒を含む。色調は暗赤褐色。第Ⅴ層出土。6は外面に横位の条痕をもつ小片。外面には土中の鉄分により、砂が付着する。第Ⅳ層出土。7は底面がくぼむ高台状の底部である。若干、底部側縁部が張りだす。復元底径9.0cm。観察トレンチ1の第Ⅵ層出土。8は台形状突起の部位片。胎土には多量の2~4mmの石英粒を含む。

1~4はその文様の特徴より、縄文時代前期の曾畑系土器に属する。

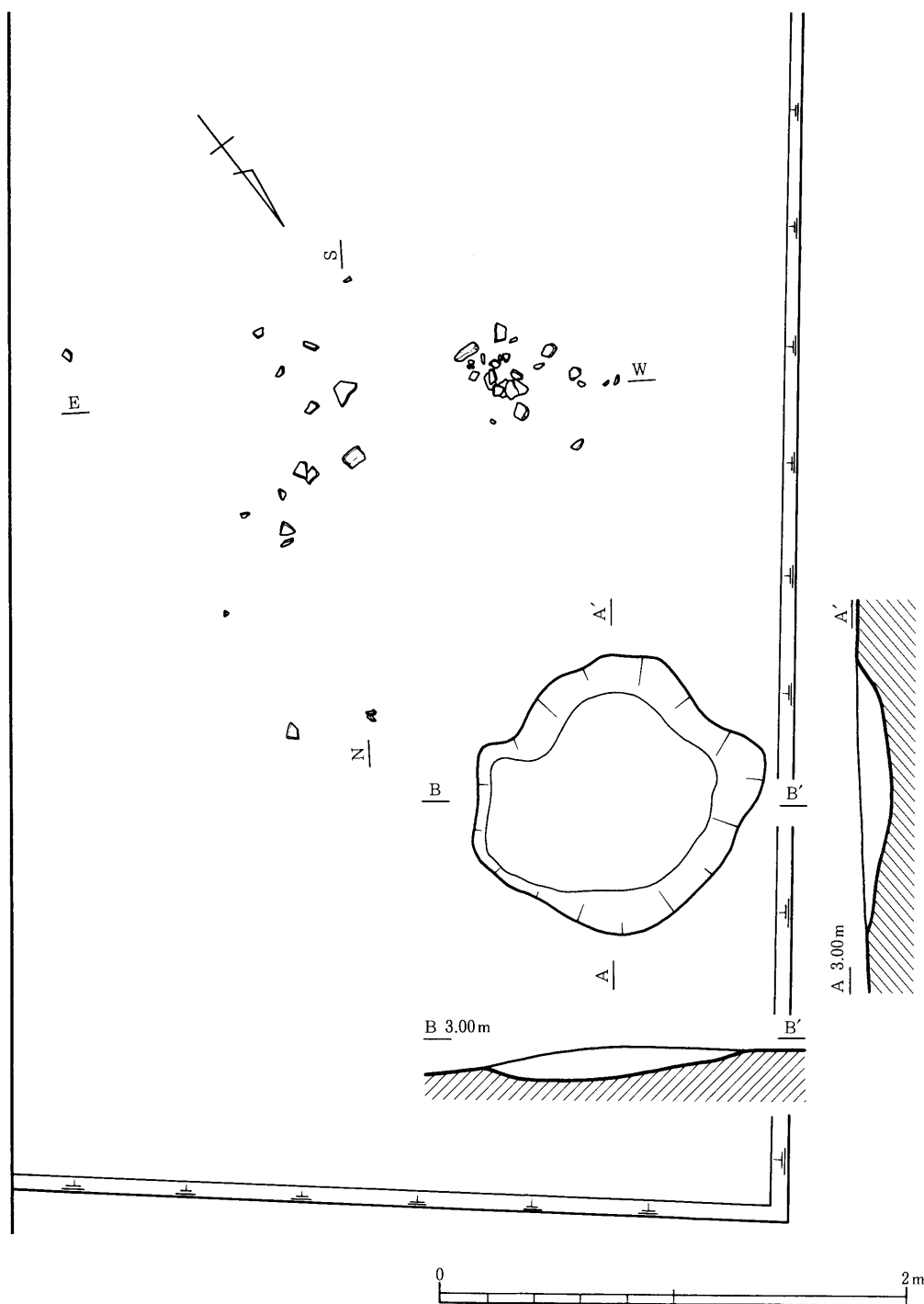


Fig. 35 第23号土壌及びび土器集中区配置図

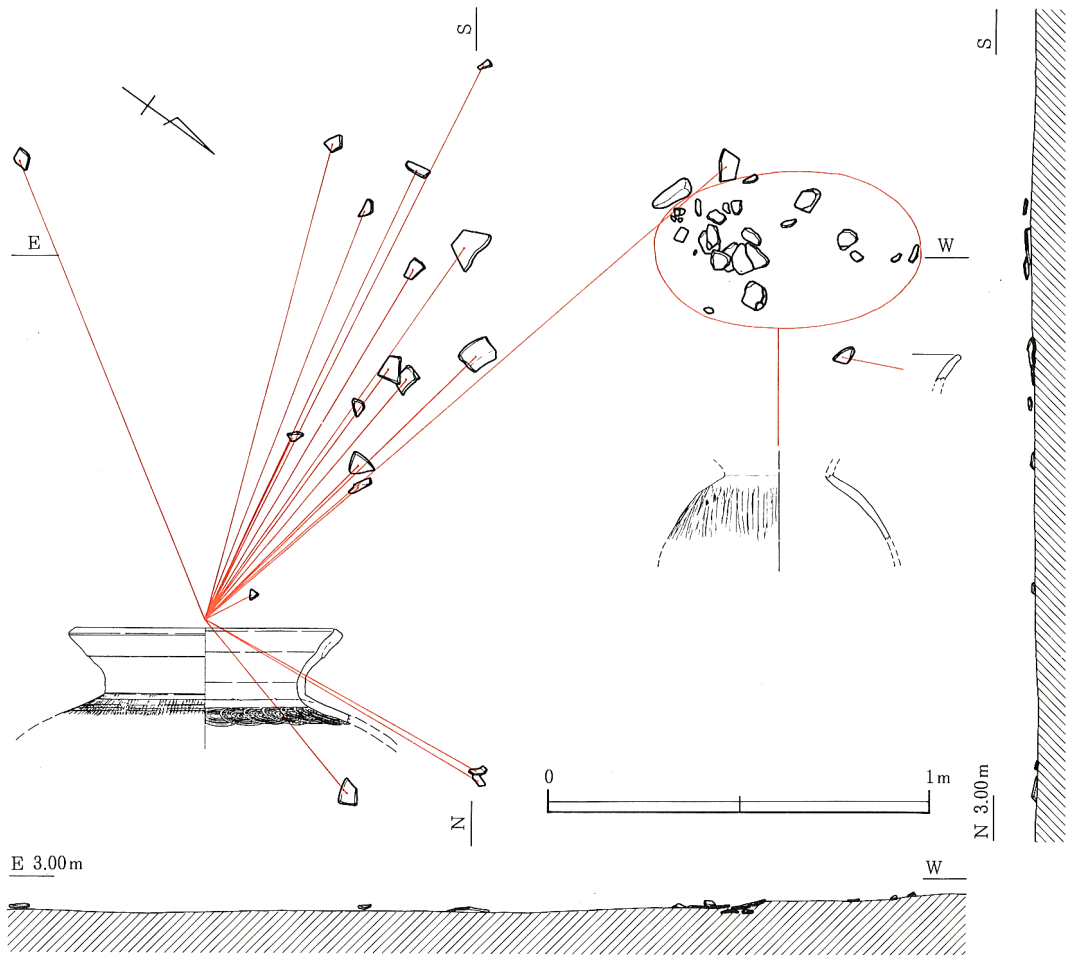


Fig. 36 土器集中区出土状況図

第23号土壌 (Fig.35, PL.27)

観察トレンチ2の拡張区北端で検出された土壌である。平面形態は不整形を呈し、直径約120cmの規模をもつ。深さは検出面から約14cmである。検出面の標高は約2.96m、底面の標高は2.82mである。土壌内は炭灰で充填されており、壁面の地山は熱により白く変色していた。須恵器片12が1片出土している。

土器集中区 (Fig.35・36, PL.28)

観察トレンチ2の拡張区全域にわたり、第Ⅶ層地山上面に張り付くようにして検出された土器群である。その検出面の標高は2.90mである。土器群は古墳時代の須恵器と土師器からなり、同時期のものと考えられる。10の土師器壺はその位置で潰れたごとく、1カ所

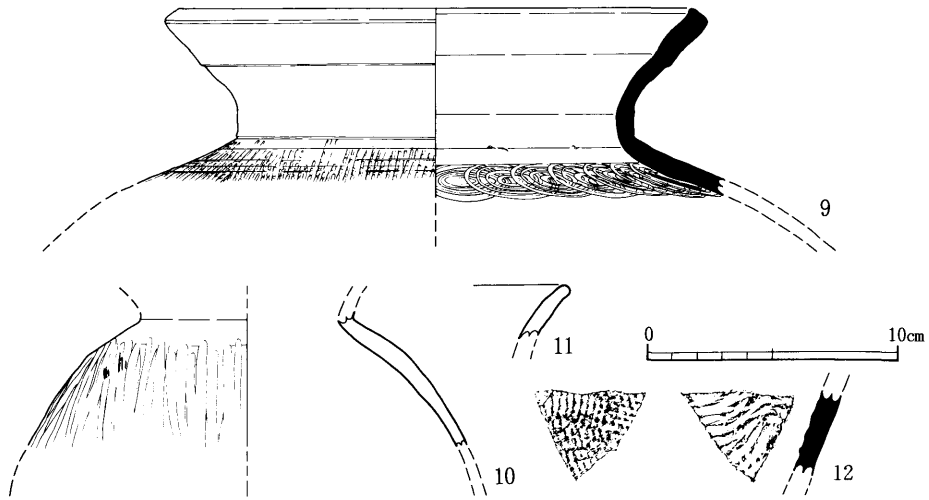


Fig. 37 第23号土壙及び土器集中区出土遺物実測図

にまとまっていた。これに対し、9の須恵器甕は拡張区全域に広く破片が散らばっていた。なお、第23号土壙出土の須恵器片12は、これら土器群と同時期であると考えられる。炭灰が充填した土壙を炉にみたと、土器群を床面に散らばった状況とするならば、住居跡と考えることも可能である。

第23号土壙出土遺物 (Fig.37-12, PL.31)

12は須恵器甕の胴部片である。外面は格子目のタタキ後に、カキ目が施される。内面には同心円のあて具痕を残す。色調は淡青灰色である。

土器集中区出土遺物 (Fig.37-9~11, PL.31・32)

9は須恵器の甕である。口縁部から肩部までが残存する。頸部は外反し、屈曲しながら口縁部へと立ち上がる。口縁部は外面に粘土を貼りだし、肥厚させている。口縁端部は面をもち、内端をヨコナデによってつまみ出す。肩部は頸部より強く張り出す。肩部外面の格子タタキは、カキ目によってナデ消される。内面には同心円のあて具痕を残す。色調は灰青色。復元口径20.4cm。

10は土師器の壺である。しまった頸部に対して、胴部はやや張り気味である。外面の調整は、タテハケ後タテミガキである。内面の調整は風化のため、観察は不可能であった。色調は淡赤褐色。この壺は1個体分が潰れた出土状態であったが、それぞれの破片が著しく風化し、接合は不可能であった。このため、胴部上半のみの図上復元となった。

11は甕の口縁部片である。口縁端部は面をもち、下端がやや肥厚する。外面には強いヨコナデの条線が残る。色調は暗褐灰色。

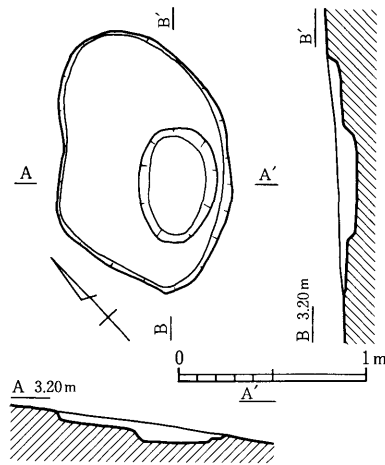


Fig. 38 第24号土壌実測図

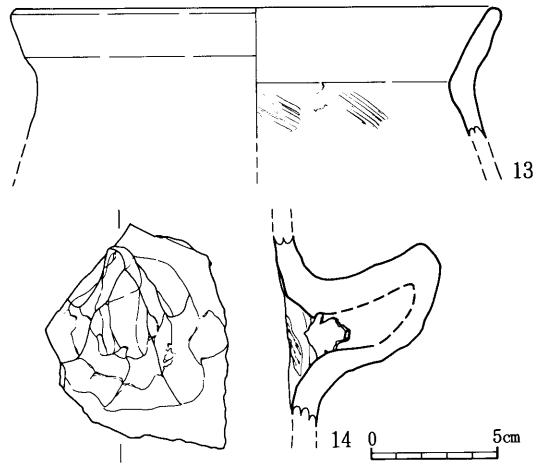


Fig. 39 第24号土壌出土遺物実測図

第24号土壌 (Fig.38, PL.27)

調査区の中央部、平成3年度トレンチの北側に位置する2段掘りの土壌である。平面形は楕円形を呈し、長軸140cm、短軸90cmの規模をもつ。検出面から10cm程の深さに1段目の底面がある。この1段目の底面の南よりに長軸60cm、短軸40cmの楕円形の平面を呈する2段目が掘りこまれる。2段目の底面は、検出面から約18cm程の深さである。検出面の標高は、西側で3.15m、東側で3.00mである。1段目の底面標高は、西側で3.09m、東側で3.01mである。2段目の底面標高は、約2.98mである。長軸方向は南-北。埋土は暗褐色砂である。古墳時代後期と考えられる甕口縁部13が出土している。なお、14は排土からの表採ではあるが、胎土・色調などから13の把手と考えられるものである。

第24号土壌出土遺物 (Fig.39-13・14, PL.32)

13は土師器甕である。口縁部と胴部上半が残存する。頸部には強いヨコナデが施され、口縁部はかすかな稜をもって外方に開く。頸部が強いヨコナデによってくぼむため、口縁部の外面下端はやや肥厚気味である。口縁部は最終調整としてヨコナデが施され、内面のヨコハケは消される。口縁端部は面をもつ。胴部外面はナデ調整であるが、部分的に極めて細かい条線が観察できる。胴部内面もナデ調整であるが、頸部下にはあらいハケの痕跡が残る。胎土は4mm前後の砂粒を含む。色調は暗赤褐色である。復元口径18.6cm。

14は土師器甕の角状把手である。排土の置き場から表採した。胎土、色調が13の甕に類似し同一個体と考えられる。外面の調整はナデ。内面把手部分は中空で、その周囲はケズリによる調整を行っている。その特徴より、古墳時代後期に属すると考えられる。

第Ⅵ層（包含層 3）出土遺物（Fig.40-15~23, PL.32・33）

本来ならば、第Ⅵ層と同じく第Ⅶ層（地山）の上面に堆積し、第Ⅰ遺構面の基盤となる第Ⅴ層（包含層 2）の出土遺物も報告を行うべきであろうが、第Ⅴ層からはほとんど図示できるような遺物が出土しなかった。このため、第Ⅵ層出土遺物の報告に偏らざるを得なかった。第Ⅵ層は暗褐灰色を呈する砂層であるが、粘性があり峨嵋山からの流れ込みによって、形成されたものと考えられる。第Ⅵ層中には、古墳～中世の遺物が含まれている。

古墳時代遺物（Fig.40-15~19, PL.32・33）

15は高坏の中空脚部である。縦長円錐形の脚に、強く屈曲し広がった裾部をもつ。脚部外面はかすかに面取りを行う。内面中空部分は、上端に及ぶものではない。内外面ともにハケ調整が施される。外面ハケ調整は、縦方向で基部から裾部にむかって施される。基部のハケは、坏部接合時の強いヨコナデによって消される。内面ハケ調整は、螺旋状に反時計回りで施される。裾部のハケ調整は、強いヨコナデによって消される。完成した脚部に、粘土を貼りだし坏部を形成したのか、脚基部には坏部の剥離痕を残す。胎土は金雲母の混入が目立つ。色調は明褐色。観察トレンチ 1 出土。

16~18は甕口縁部である。いずれも観察トレンチ 2 から出土。16は胴部と考えられる破片も出土しているが、接合できなかつた。短く外方に開いた口縁部である。ヨコナデが施されているが、口縁基部にはハケ調整の痕跡を残す。口縁端部は丸く収めている。胎土は 1~2mm の砂粒を含む。色調は褐灰色。復元口径 17.0cm。17は大きく外弯した口縁部をもつ。口縁端部はヨコナデによって上方につまみあげられ、端面を拡張する。内外面ともにヨコナデが施される。胎土は微砂粒を含む。色調は赤褐色。18も大きく外弯した口縁部をもち、口縁端部は上方につまみあげられる。口縁端部は幅の広い、傾斜した面をもつ。外面はヨコナデ調整であるが、内面にはハケ調整を残す。胎土は 1mm 前後の砂粒を含む。色調は暗灰色。

19は碗形の坏である。内弯ぎみの口縁部をもつ。口縁端部は幅 1cm にわたって、内外面同時にヨコナデが施される。口縁内面はこのヨコナデによってやや凹面をなす。口縁端部は丸く収められるが、外方にわずかに突出する。内外面ともにナデ調整。胎土は微砂粒を含むが、精製の粘土である。色調は灰褐色。復元口径 10.4cm。観察トレンチ 2 出土。

以上、15~19までが古墳時代に属する遺物である。このうち、16~19までが観察トレンチ 2 からの出土である。これらは、前出の 9~11 の須恵器や土師器とともに、土器群を形成していた可能性が強い。

第VI層（包含層3）出土遺物

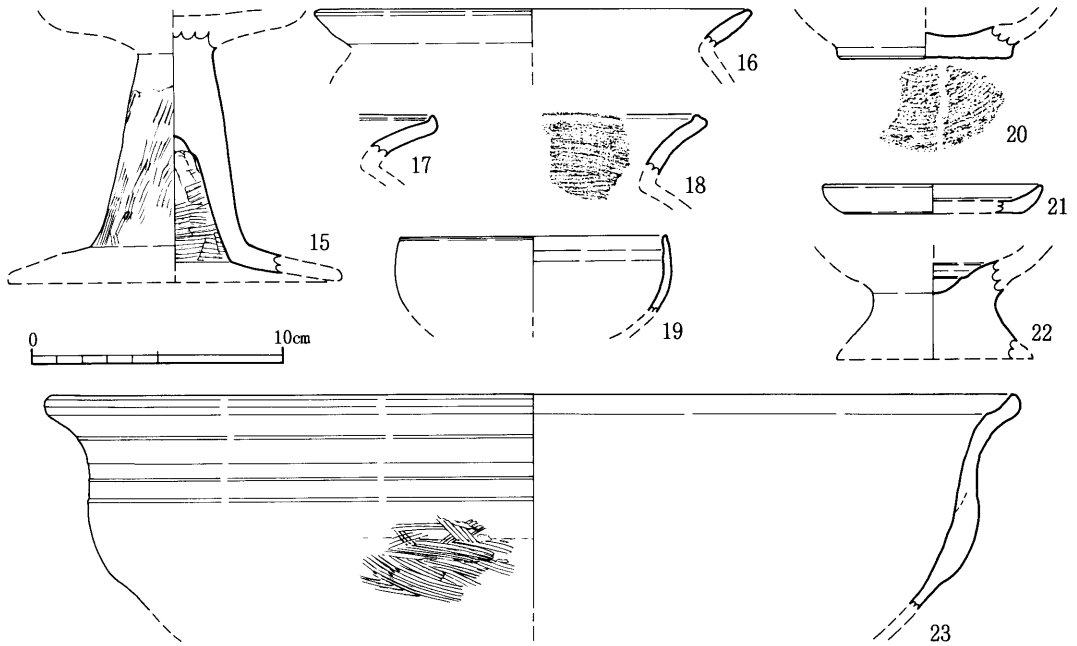


Fig. 40 第VI層（包含層3）出土遺物実測図

中世遺物（Fig.40-20～23, PL.33）

20は土師器碗の底部である。胴部からやや突出した、平底の底部をもつ。底面には、糸切りの跡を残す。胎土は1～3mmの砂粒を含む。色調は淡赤褐色。復元底径6.7cm。

21は土師器皿である。平底の底部から口縁部が短く立ち上がり、器高は低い。胎土は精製粘土に、黒雲母を含んだ微砂粒を混じえる。色調は淡赤褐色。復元口径8.6cm、復元底径7.0cm、器高1.15cmを測る。

22は台付皿の脚部である。脚裾部は外側に大きく開くが、その端部を欠いている。底部は平底で、糸切り痕を残す。皿部は欠くが、脚基部の内面中央が指圧によりくぼむ。くぼみは螺旋状の渦をまいており、成形時における皿部引出しの痕跡と考えられる。胎土は精製粘土である。

23は鍋である。胴部下半を欠く。口縁部に最大径をもち、器高に対して口径が大きく上回る。体部外面には、ハケ調整が施される。このハケ調整を切って、頸部から口縁部にかけて強いヨコナデが施される。口縁部は直立する頸部より外反させ、さらに強い横ナデによって端部を上方につまみだす。このため、口縁端部内面は凹面をなす。胴部内面はハケ後ナデ調整である。復元口径37.9cm。

いずれも観察トレンチ2からの出土である。

4 第1遺構面（第V層上面）の遺構・遺物（Fig.41, PL.29）

本節では、第V層：暗褐色砂の上面で検出された、遺構・遺物について記述を行う。この第V層上面の遺構検出面は、第VII層上面で検出された第2遺構面に対して第1遺構面とする。

当調査地の東半は、旧山口女子師範学校により大規模な攪乱を受けていた。このため、調査区東半での遺構は検出できなかった。ただし、第2節でも記述したように第V層の堆積は西半のみで、東半の第VI層と同時堆積の可能性がある。第V層は風積作用によって形成された砂丘状を呈するのに対して、第VI層はその砂丘と峨嵋山の間形成された谷地形の堆積を示すといえる。とすれば、安定した第V層上面に対し、第VI層上面には当初より遺構がなかった可能性がある。

第V層上面は最も高い西壁で標高3.3mを測り、周辺に行くにしたがって低くなる。特に、攪乱の及んでいた調査区中央での平面的な検出はできず、地山である第VII層上面と同時検出になった。第V層上面を遺構面として検出された遺構は、土壇4基と柱穴11基である。その埋土には、炭灰を含んだ黒色砂と、第IV層（包含層1）と同じ明茶灰色砂のものがある。これらの土壇や柱穴からは、土師器碗や瓦器碗などの中世の土器が出土している。その土器の特徴からは、12世紀末～13世紀の年代が与えられる。第1遺構面が中世の遺構検出面と考えられる。

光構内では中世土器の包含層ならば附属中学校体育館²⁾を始めとして、今までに幾度も確認されてきたが、中世の遺構面が検出されたのは今回が初例となった。過去に遺構面が検出された附属小学校運動場改修に伴う発掘調査³⁾では、標高約3.3mと標高約3.0mで2面の遺構面が検出されている。それぞれ、標高的には本調査区の第1遺構面と第2遺構面に対応する。しかし、附属小学校運動場で検出された上層遺構面の土壇からは、6世紀末～7世紀初頭の須恵器が出土している。出土遺物からこの附属小学校運動場の上層遺構面と対応するのは、本調査区の第2遺構面である。このことから、本調査区の北にある附属小学校運動場が砂堆丘の中心で最も高く、中世遺構面は既に削平された可能性が考えられる。そして、砂堆丘の周辺部でやや低くなった、本調査区の中世遺構面が残されたのであろう。このことは、本調査区の包含層における中世遺物の出土量および、遺構の分布密度の低さからも肯定される。

なお、試掘調査において検出されていた遺構は、その埋土からこの第1遺構面に伴うものと推定される。

第1遺構面（第V層上面）の遺構・遺物

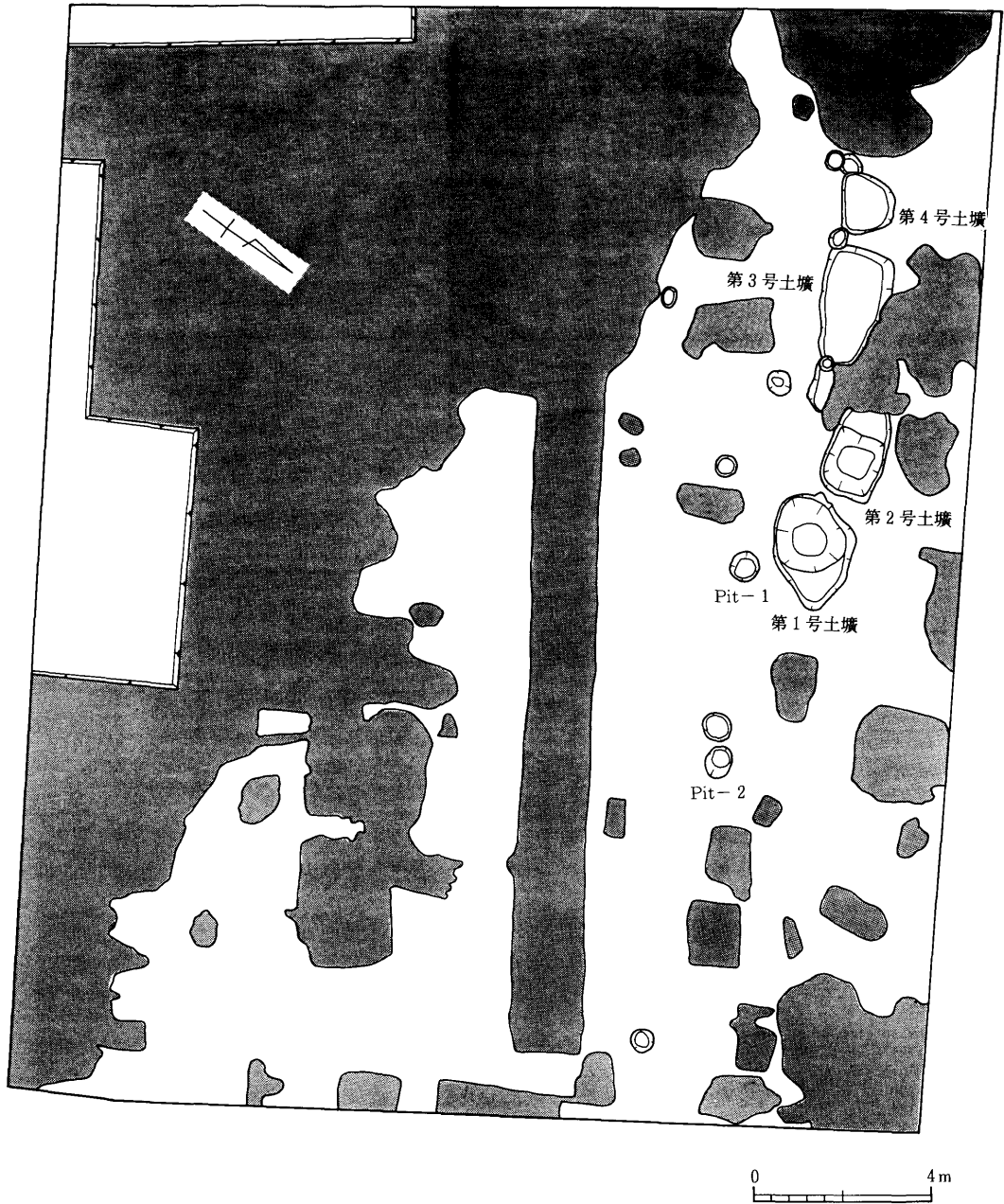


Fig. 41 第1遺構面遺構配置図

アミ目 攪乱

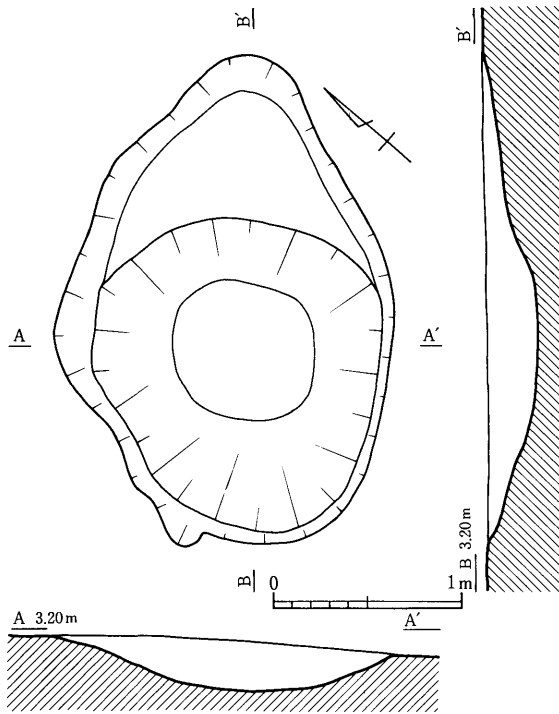


Fig. 42 第1号土壙実測図

第1号土壙 (Fig.42, PL.30)

第1号土壙は調査区西側の中央に位置する。上面の平面形態は不整楕円形を呈し、長軸260cm、短軸180cmの規模をもつ。長軸の東北側が2段掘りになっており、標高約3.05mで幅約60cmの平坦部をもつ。底面での平面形態は円形で、深さは土壙検出面から約30cmを測る。なお、土壙検出面の標高は約3.15m、底面標高は約2.86mである。長軸方向は、東北-西南。埋土は炭灰を含んだ黒色砂である。比較的遺物を多く含んでおり、瓦器壙24、土師器壙25、土師器皿29などが出土している。それら出土土器の特徴は、12世紀後半～13世紀前半を示す。

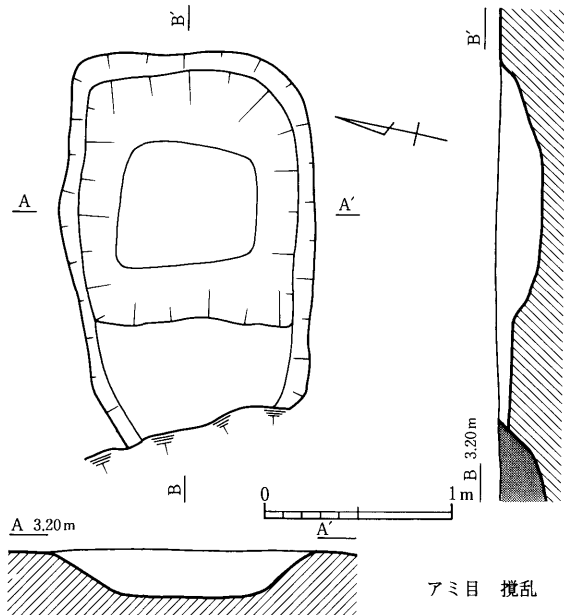


Fig. 43 第2号土壙実測図

第2号土壙 (Fig.43, PL.30)

第2号土壙は、第1号土壙の西側に隣接する。西端部は後世の攪乱を受け、検出することはできなかったが、平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸200cm以上、短軸130cmの規模をもつ。長軸の西側が2段掘りになっており、標高約3.05mで幅約60cmの平坦部をもつ。底面での平面形態もまた、隅丸長方形で、深さは土壙検出面から約20cmを測る。なお、土壙検出面の標高は約3.10m、底面標高は約2.89mである。長軸方向は、東-西。埋土は炭灰を含んだ黒色砂である。遺物はほとんど含まれていなかったが、図示できるものとして砥石片38が1点出土している。

第1遺構面（第V層上面）の遺構・遺物

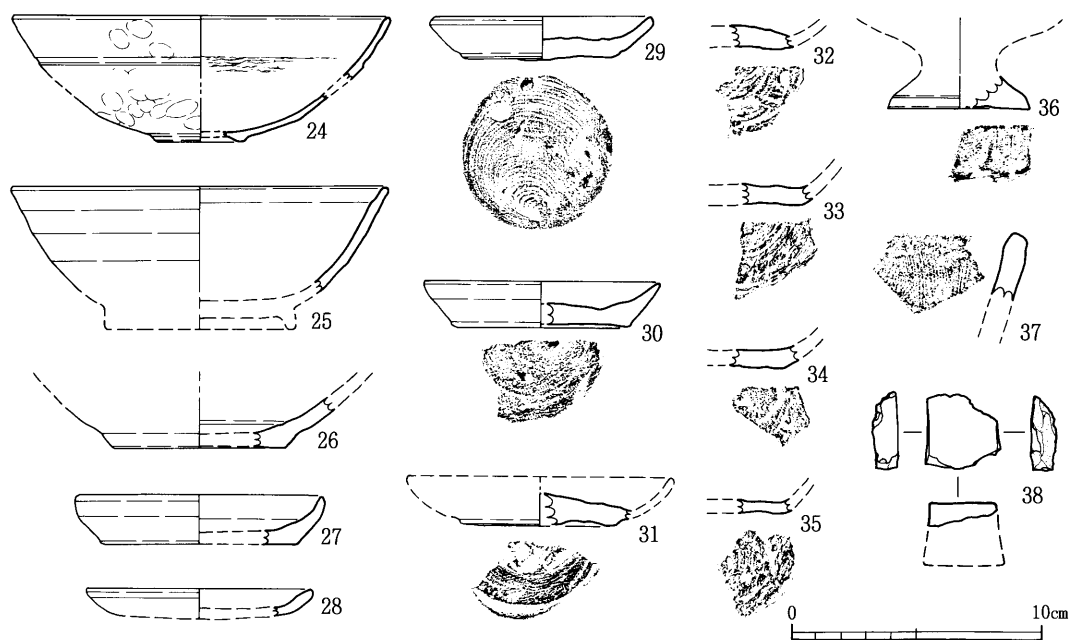


Fig. 44 第1・2号土壇出土遺物実測図

第1号土壇出土遺物 (Fig.44-24~37, PL.34)

24は瓦器碗である。口縁端部は丸い。外面口縁部よりやや下がった位置に、1条の凹線がめぐる。この凹線より下に、指頭圧痕が顕著である。内面に形成時のシワが残る。復元口径14.9cm、復元底径3.4cm。

25・26は土師器碗である。25の体部はゆるく内弯し、口縁部が内面に稜をもって外反する。口縁端部は丸い。外面にはロクロ成形による凹凸面がみられる。底部には、高台をもつと考えられる。26は平底の底部で、底面に糸切り痕を残す。

27~35は土師器皿である。29~35は糸切り痕を残す。このうち29~34は、底面中央に厚みをもった器形で同一の形態をもつ。27も同じ形態であるが、破片のため底面糸切り痕の有無を確認できなかった。28は器高が低く、浅い。口縁端部は丸くおさめられる。器壁の厚さはほぼ一定である。底面に糸切り痕は認められない。

36は台付皿の脚部である。外側に突出した裾部分。底部は糸切り。復元底径5.6cm。

37は器種不明の土師器口縁部。器壁が厚く、外面にハケが施されている。

第2号土壇出土遺物 (Fig.44-38, PL.34)

38は砥石である。両端及び下半部を欠く。残存部の上面と両側面の計3面に、使用による摩滅が認められる。石材は花崗斑岩。

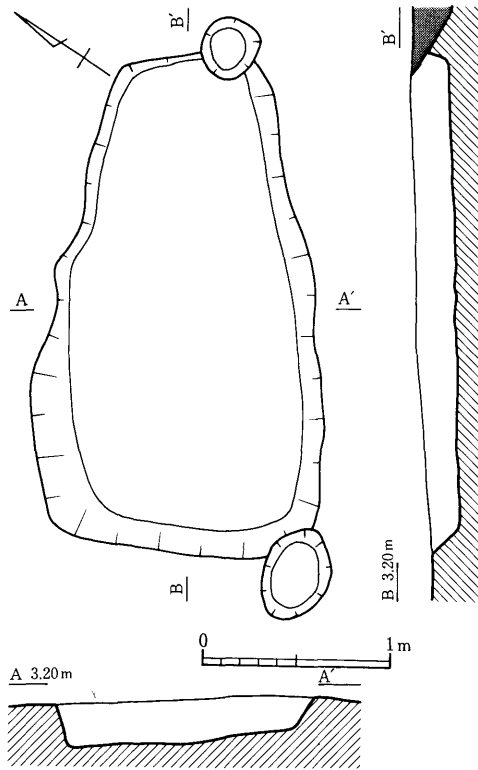


Fig. 45 第3号土壙実測図

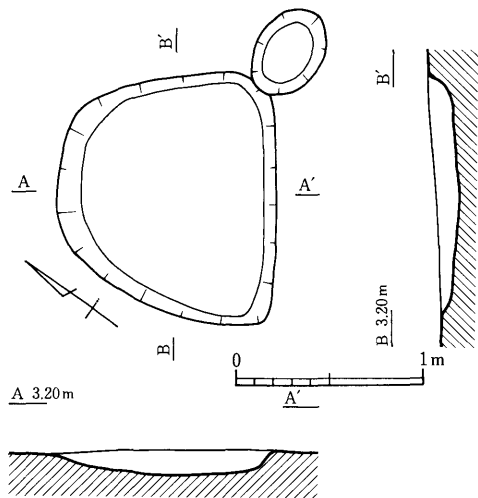


Fig. 46 第4号土壙実測図

第3号土壙 (Fig.45, PL.30)

第3号土壙は調査区の西南に位置する。南側は攪乱を受けるが、平面形態は隅丸長方形を呈していたと思われる。その規模は、長軸260cm以上、短軸160cm以上を測る。検出面からの深さは約20cmである。土壙検出面の標高は約3.12m、底面は標高2.90mである。長軸方向は東北-西南。埋土は炭灰を含んだ黒色砂である。

第4号土壙 (Fig.46, PL.30)

第4号土壙は、調査区の西南に位置する。平面形態は隅丸台形を呈し、長軸130cm、短軸116cmの規模をもつ。土壙検出面からの深さは約10cmである。土壙検出面の標高は約3.05m、底面標高は約2.82mである。長軸方向は東北-西南。埋土は炭灰を含んだ黒色砂である。図示できるような遺物は出土しなかった。

柱穴群 (Fig.41, PL.31)

第1遺構面で検出された柱穴は、11基である。いずれも直径60~40cmのものである。遺物が出土したのは、調査区西南のPit-1と南のPit-2のみである。

Pit-1は平面形態が円形で、直径は約60cmを測る。深さは検出面より約27cmである。土師器碗44、土師器皿44・45などが出土している。

Pit-2は長軸約70cm、短軸約60cmの平面形態が楕円形を呈する。深さは検出面より、約32cmである。須恵器胴部片46が1点出土しているが混入であろう。

第3号土坑出土遺物 (Fig.47-39~42, PL.35)

39~41は同一個体の破片と思われる。土師質であるが、外面に格子目状のタタキが施されている。内面には粗いハケが施されている。色調は明褐色を呈し、2次焼成を受けた形跡がある。胎土は1mm前後の砂粒と赤色斑粒を含む。器形・時期は判然としない。可能性としては、古墳時代後期の韓式土師器あるいは中世の製塩土器などが考えられる。山口県内の類例として、下関市吉母浜遺跡の赤褐色土器が挙げられる。その報告書において、韓式土師器として位置づけ、年代を5世紀末頃に位置づけている。本例もこの年代に沿うのであるならば、混入品ということになる。

42は土師器の甕である。長胴の形態になると考えられる。頸部外面には、強いヨコナデが施され鋭い稜線がめぐる。胴部外面下半に左上がりのハケ調整が施される。内面はナデ調整である。外面に煤が付着する。

Pit-1 出土遺物 (Fig.48-43~45, PL.36)

43は土師器碗である。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部が外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面はロクロ成形による凹凸がみられるが、ミガキによって潰される。内面には丁寧なミガキが施される。高台をもつものと思われる。色調は明黄灰色。胎土は精製粘土である。復元口径14.1cm。

44・45は土師器皿の口縁部片である。44は外面にロクロ成形による凹凸を明瞭に残す。口縁端部は丸くおさめる。色調は淡赤褐色。胎土は精製粘土である。45もまた、外面にロクロ成形による凹凸を明瞭に残している。口縁端部は丸くおさめる。色調は淡赤褐色。胎土は精製粘土である。

Pit-2 出土遺物 (Fig.48-46, PL.36)

46は須恵器甕胴部片である。外面に平行タタキが施される。内面のあて具痕はナデ消される。色調は青灰色。胎土には微砂粒を含む。混入品と考えられる。

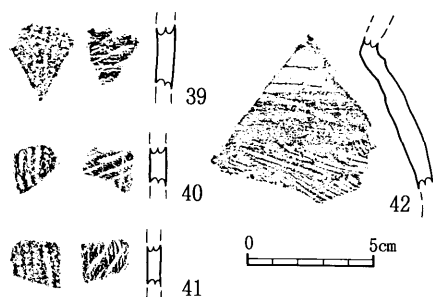


Fig. 47 第3号土坑出土遺物実測図

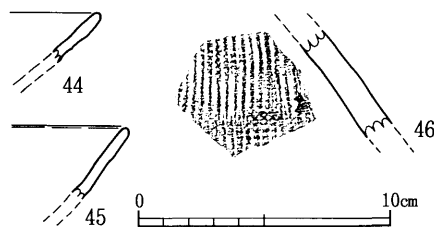
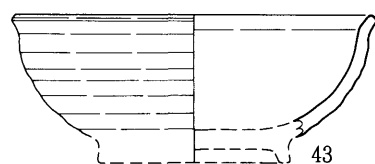


Fig. 48 Pit-1・2 出土遺物実測図

第Ⅳ層（包含層1）出土遺物（Fig.49-47-49, PL.36）

第1遺構面の上層に堆積した第Ⅳ層：明茶灰色砂（包含層1）及び攪乱層から出土した遺物である。いずれも中世の土師器である。

47は土師器碗の底部である。底面糸切りの後、高い突出する高台を貼り付ける。内面には、ミガキ調整の痕跡が残る。色調は淡赤褐色。胎土は多量の微砂粒及び、1～3mmの砂粒を含む。復元底径7.4cm。

48・49は土師器皿である。48は口縁部片である。底面より内湾ぎみに立ち上がり、口縁部が緩く外反する。口縁部には、強いヨコナデの条線を残す。色調は淡赤褐色。胎土は1mm前後の砂粒を含むが、緻密である。復元口径13.0cm。49は底部である。底面は糸切りである。外面底部の端に圧痕が残る。内面には、ロクロ成形による凹凸を残す。色調は淡赤褐色。胎土には微砂粒及び、1～3mmの砂粒を含む。底径5.85cm。

御手洗湾採集遺物（Fig.49-50, PL.36）

御手洗遺跡が周知されるに至ったのは、昭和25年に小野忠熙氏が光構内に面する海岸線で土師器を採集したことに始まる⁵⁾。現在でも、この海岸線では遺物の散布が見られる。

既に、年報Xにおいて土師器などの一部の採集遺物については報告を行っている。今回、白磁碗を採集したので紹介しておく。

50は白磁碗である。胴部は内湾して立ち上がる。口縁を外側に折り返し、端部は玉縁状を呈する。外面にはロクロ成形による凹凸を残す。白地の素地に、薄緑色の釉薬を施釉する。復元口径は16.2cmである。

5 小結

今回の光附属中学校武道館新営に伴う発掘調査では面積が約500m²と、従来の光構内における調査との間には、その規模において格段の差がある。この面的な調査によって、新たに得られたデータは、詳細不明であった御手洗遺跡の実態把握の手がかりとなるものである。

今回の調査では、上下2面の遺構面を検出した。第Ⅴ層：暗褐色砂の上面を検出面とする第1遺構面と、第Ⅶ層：淡灰黄色砂の上面を検出面とする第2遺構面である。第2遺構面は古墳時代後期、第1遺構面は中世に位置づけられる。御手洗遺跡では過去に附属小学校運動場で古墳時代後期の遺構面が2面検出されている。うち1面が、今回検出された古墳時代後期の第2遺構面と対応するのであろう。また、今回初めて検出されたのが、中世に位置づけられる第1遺構面である。過去に、中世の包含層があることは知られていたが、

第IV層（包含層1）出土遺物

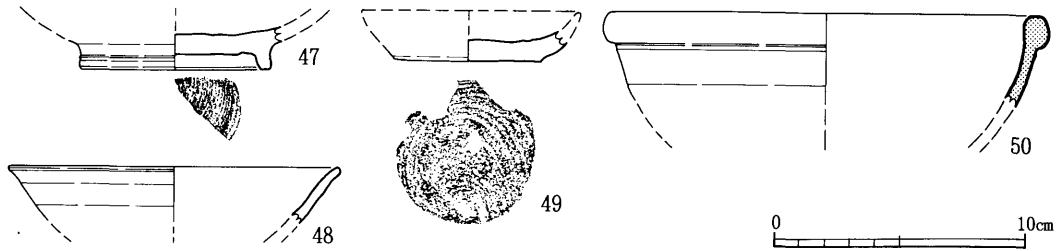


Fig. 49 第IV層（包含層1）出土及び御手洗湾採集遺物実測図

遺構面が確認された意義は大きい。このことより、御手洗遺跡では少なくとも、時期の異なる3面の遺構面が埋存することが明かとなった。御手洗遺跡は砂堆丘上に、古墳時代後期から近世まで継続的に営まれた集落遺跡である。今後の調査によっては、さらに累積した遺構面が検出される可能性がある。

本調査区の遺構分布密度は、第1、第2遺構面ともに希薄であった。わずかな土壌と柱穴が検出されたのにとどまった。柱穴もまとまりがなく、構造物があった可能性はきわめて低い。唯一の可能性としては、第2遺構面の炭灰を充填した第23号土壌とこれを中心として散在していた須恵器及び土師器が、その検出状況から住居跡であった可能性がある。これ以外は包含層中の土器量もわずかであり、御手洗遺跡の縁辺部であったと考えられる。遺跡の中心としては、より海岸部によった附属中学校体育館あるいは、附属小学校運動場などが想定されよう。今後の継続した調査の成果が期待される。

特筆できる遺物として、第22号土壌及び第V層などから出土した縄文土器が挙げられる。当初より第22号土壌に伴うものであったかは慎重を期したいが、この縄文土器は前期の曾畑系土器である。現在まで知られていた附属中学校体育館から出土した縄文土器は、晩期に属するものと言われている。御手洗遺跡の上限を、大きく遡らせることとなった。

第1遺構面の第1号土壌は、比較的多くの遺物が出土した。土師器皿を中心とするが、瓦器碗が1点出土している。土師器皿がきわめて地域色の強い土器だけに、瓦器碗から得られる年代をもって土師器皿の位置づけを推測することができる貴重な土壌資料である。

この他、第3号土壌から出土した、39～41の土師質土器片が問題となる。外面に格子目状のタタキを、内面には粗いハケが施されている。可能性としては、古墳時代後期の韓式土師器あるいは中世の製塩土器などが考えられるが、定かではない。結論は今後、類似資料の増加に待ちたい。

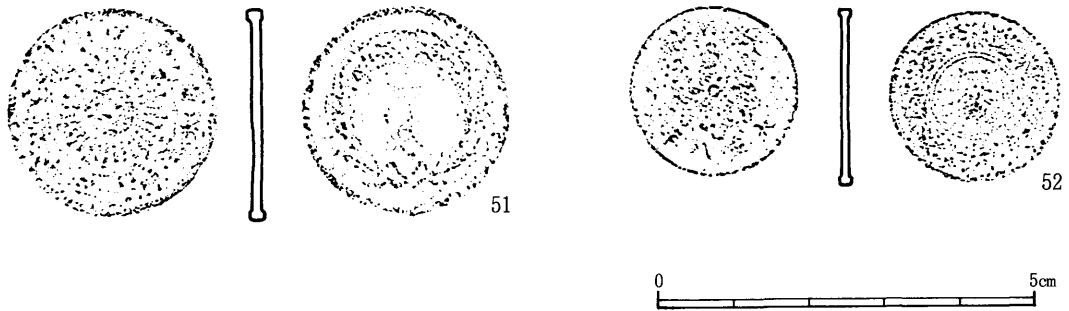


Fig. 50 攪乱層出土貨幣

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う試掘調査」
(『山口大学構内遺跡調査研究年報』XI、1993年)
- 2) 福本幸夫「御手洗遺跡」(『先原史時代の光市』、1966年)
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」
(『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1992年)
- 4) 下関市教育委員会『吉母浜遺跡』(1985年)
- 5) 小野忠熙「島田川流域の遺跡群」(『島田川』、1953年)
- 6) Fig.50-51・52は、調査区東側の攪乱層(南壁の瓦礫層に対応)から出土した貨幣である。両者ともかなり緑錆に覆われており、保存状態は劣悪といえる。
51は明治32年(1899)に発行された稲一銭銅貨である。直径約2.8cm、厚さは縁約0.2cm・中央約0.15cm。
52は大正8年(1919)に発行された桐1銭銅貨である。直径約2.35cm、厚さは縁約0.2cm・中央約0.1cm。
貨幣が出土した攪乱層は、旧山口県女子師範学校の取り壊し時における廃材を焼却投棄した場所と考えられる。52の貨幣が、攪乱層形成の上限を示している。
日本貨幣商協同組合『日本貨幣型録“79年版”』(1979年)

出土遺物観察表

Tab. 3 出土遺物観察表

法量()は復元値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	出土地点	備考
縄文土器 (Fig.34)						
1	縄文土器		暗赤褐色	2~4mmの砂粒を含む	表採	2.5mm幅の貝殻条痕
2	縄文土器		①暗赤褐色 ②褐灰色	2~4mmの砂粒を含む		2mm幅の貝殻条痕
3	縄文土器		①暗赤褐色 ②褐灰色	2~4mmの砂粒を含む		2mm幅の貝殻条痕
4	縄文土器		暗赤褐色	2~4mmの砂粒を含む		2.5mm幅の貝殻条痕
5	縄文土器		暗赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	SK-06南半出土	2.5mm幅の貝殻条痕
6	縄文土器		暗赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		2mm幅の貝殻条痕
7	縄文土器	底部 ②(9.0)	褐灰色	2~5mmの砂粒を含む		
8	縄文土器		褐灰色	2~4mmの砂粒を多量に含む		突起か
土器集中区 (Fig.37)						
9	須恵器 甕	①(20.4)	灰青色	微砂粒を含む		外面格子タタキ 内面同心円タタキ
10	土師器 壺		淡赤褐色	微砂粒および、1~3mmの砂粒を含む		外面ハケ後ミガキ
11	土師器 甕 口縁		暗褐灰色	1~3mmの砂粒を含む		
第23号土壌 (Fig.37)						
12	須恵器 甕胴部片		淡灰青色	微砂粒を含む		2mm角のタタキ痕
第24号土壌 (Fig.39)						
13	土師器 甕	①(18.6)	暗赤褐色	4mm前後の砂粒を含む		内面ハケ
14	土師器 甕 把手		暗赤褐色	微砂粒を含む		
第VI層 (包含層3) (Fig.40)						
15	土師器 高坏脚部		明褐色	金雲母を含む		内外面にハケ
16	土師器 甕 口縁	①(17.0)	褐灰色	1~2mmの砂粒を含む		
17	土師器 甕 口縁		明赤褐色	微砂粒を含む		口縁端部ハネ上げ
18	土師器 甕 口縁		暗灰色	1mm前後の砂粒を含む		内面ハケ
19	土師器 碗 口縁	①(10.4)	灰褐色	微砂粒を含む		
20	土師器 皿 底部	②(6.7)	淡赤褐色	1~3mmの砂粒を含む		底部糸切り
21	土師器 皿	①(8.6)②(7.0)③(11.5)	淡赤褐色	黒雲母を含む		
22	土師器 台付皿		淡褐色	精製粘土		
23	土師器 鍋 口縁	①(37.9)	淡褐色	微砂粒及び、1~4mm前後の砂粒を含む		内面ハケ後ナデ
第1号土壌 (Fig.44)						
24	瓦器 碗	①(14.9)②(3.4)	黒灰色	精製粘土		器表に指頭圧痕あり 内面にシワあり
25	土師器 碗 口縁	①(14.8)	黄白色	精製粘土		
26	土師器 皿 底部	②(6.6)	明褐色	精製粘土		底部糸切り
27	土師器 皿	①(9.6)②(7.6)③(2.0)	淡褐灰色	精製粘土		底部に圧痕あり
28	土師器 皿 口縁	①(8.8)	褐色	微砂粒を含む		2次焼成を受ける
29	土師器 皿	①8.6②5.85③(17.5)	褐灰色	精製粘土		底部糸切り
30	土師器 皿	①(9.3)②(6.8)③(1.8)	①褐灰色 ②淡赤褐色	精製粘土		底部糸切り
31	土師器 皿 底部	②(6.2)	褐灰色	精製粘土		底部糸切り
32	土師器 皿 底部		褐灰色	精製粘土		底部糸切り
33	土師器 皿 底部		淡褐色	精製粘土		底部糸切り

光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査

法量()は復元値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	出土地点	備考
34	土師器 皿 底部		明褐色	微砂粒を含む		底部糸切り
35	土師器 皿 底部		明褐色	微砂粒を含む		底部糸切り後ナデ
36	土師器 台付皿	②(5.6)	明赤褐色	精製粘土		底部糸切り
37	土師器 口縁		明褐色	微砂粒を含む		外面ハケ
第3号土壌 (Fig.47)						
39	土師質土器		明褐色	1mm前後の砂粒を含む		
40	土師質土器		明褐色	1mm前後の砂粒を含む		
41	土師質土器		①黒灰色(褐色) ②明褐色	1mm前後の砂粒を含む		
42	土師器 甕		暗褐色	微砂粒を含む		内外面ナデ外面ハケ 煤付着
Pit-1 (Fig.48)						
43	土師器 碗	①(14.1)	明黄灰色	精製粘土		内外面ミガキ
44	土師器 皿 口縁		淡赤褐色	精製粘土		外面ナデ
45	土師器 皿 口縁		①淡赤褐色 ②褐灰色	精製粘土		外面ナデ
Pit-2 (Fig.48)						
46	須恵器 甕胴部片		①灰青色 ②青灰色	微砂粒を含む		外面2mm角のタタキ 痕
第IV層(包含層) (Fig.49)						
47	土師器 碗 底部	②(7.4)	淡赤褐色	微砂粒及び、1~3mm の砂粒を含む		底部糸切り
48	土師器 皿 口縁	①(13.0)	淡赤褐色	1mm前後の砂粒を含む		内外面ナデ
49	土師器 皿 底部	②5.85	淡赤褐色	微砂粒及び、1~2mm の砂粒を含む		底部糸切り、圧痕あり
御手洗湾表探 (Fig.49)						
50	白磁 口縁	①(16.2)	釉調 薄緑色 素地 白色	精製粘土		

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第2号土壌 (Fig.44)							
38	砥石				7.90	花崗斑岩	

番号	器種	年号	直径	最大厚 (cm)	重量 (g)	発行枚数	備考
攪乱層 (Fig.50)							
51	稲1銭銅貨	明治32年	2.8	0.2		9,764,028	
52	桐1銭銅貨	大正8年	2.35	0.2		209,959,359	

光構内（教育学部附属光小学校・同光中学校）全景（北東から）



光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査

(1)



(1) 調査区南壁土層断面（西から）



(2) 調査区東壁土層断面（南から）



(1) 調査前全景（北から）



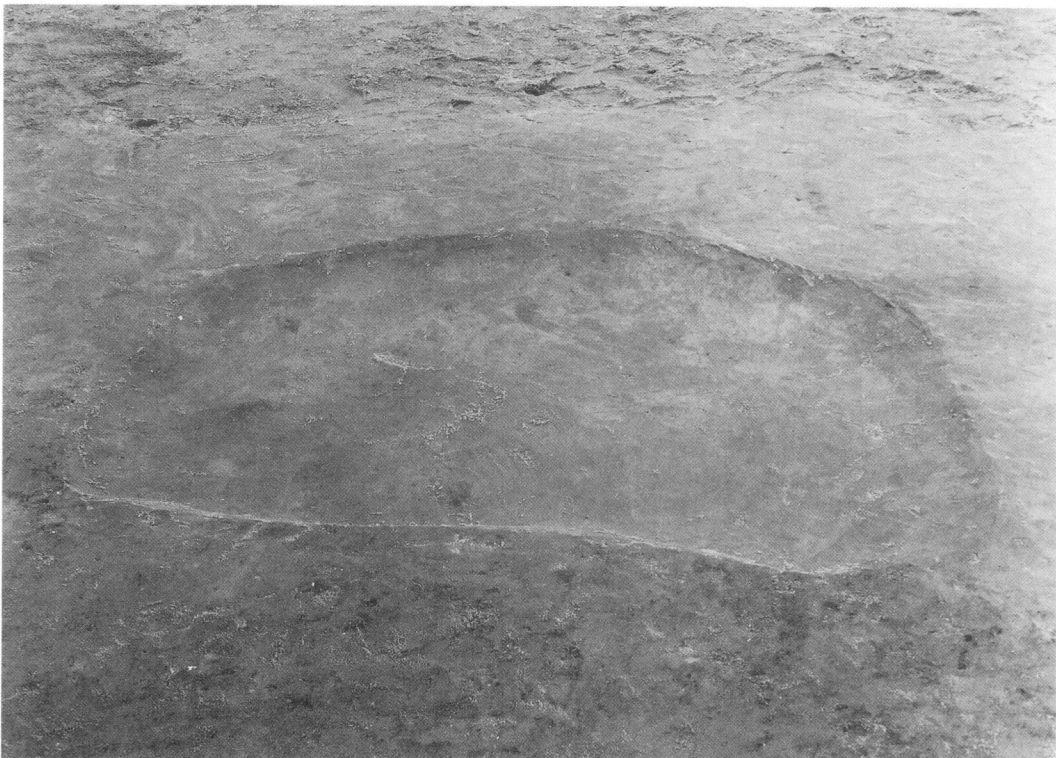
(2) 第2遺構面完掘状況（北から）

光
構
内
教
育
学
部
附
属
光
中
学
校
武
道
館
新
営
に
伴
う
発
掘
調
査

(3)



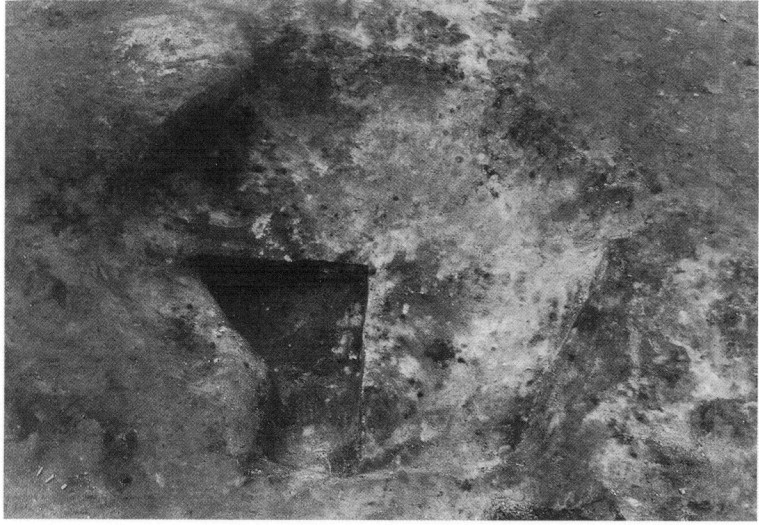
(1) 第21号土壙（西から）



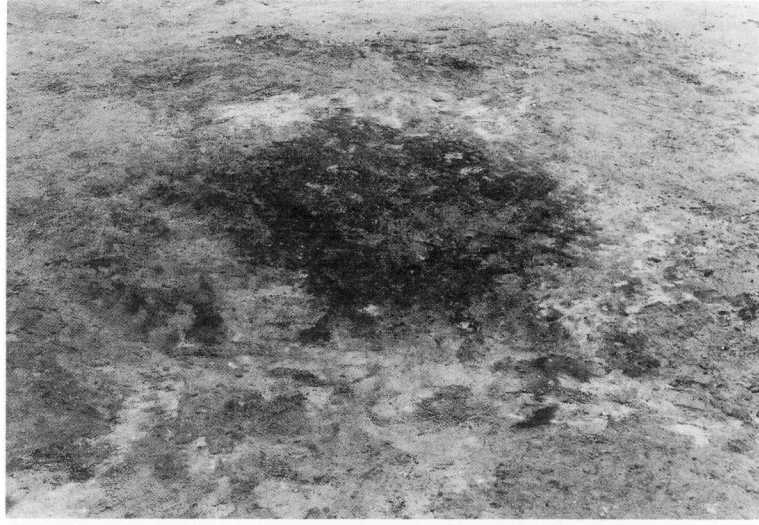
(2) 第22号土壙（東から）

光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査

(4)



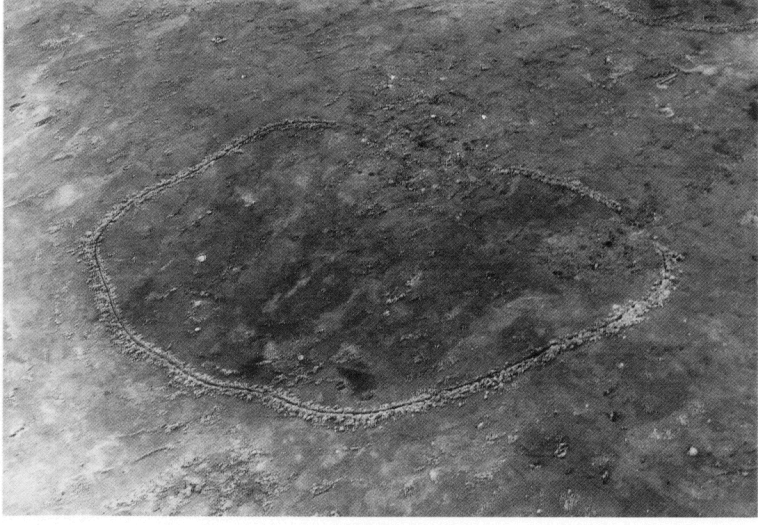
(2) 第23号土壙完掘状況(東から)



(1) 第23号土壙検出状況(東から)



(4) 第24号土壙完掘状況(東から)

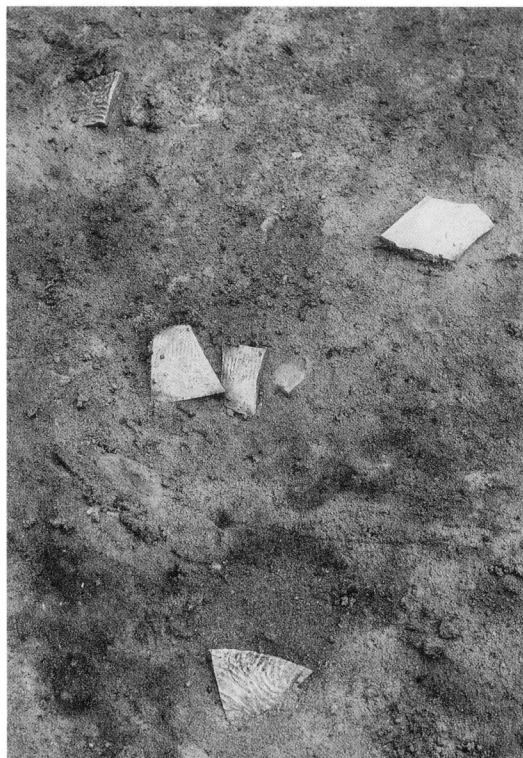


(3) 第24号土壙検出状況(東から)

(5)



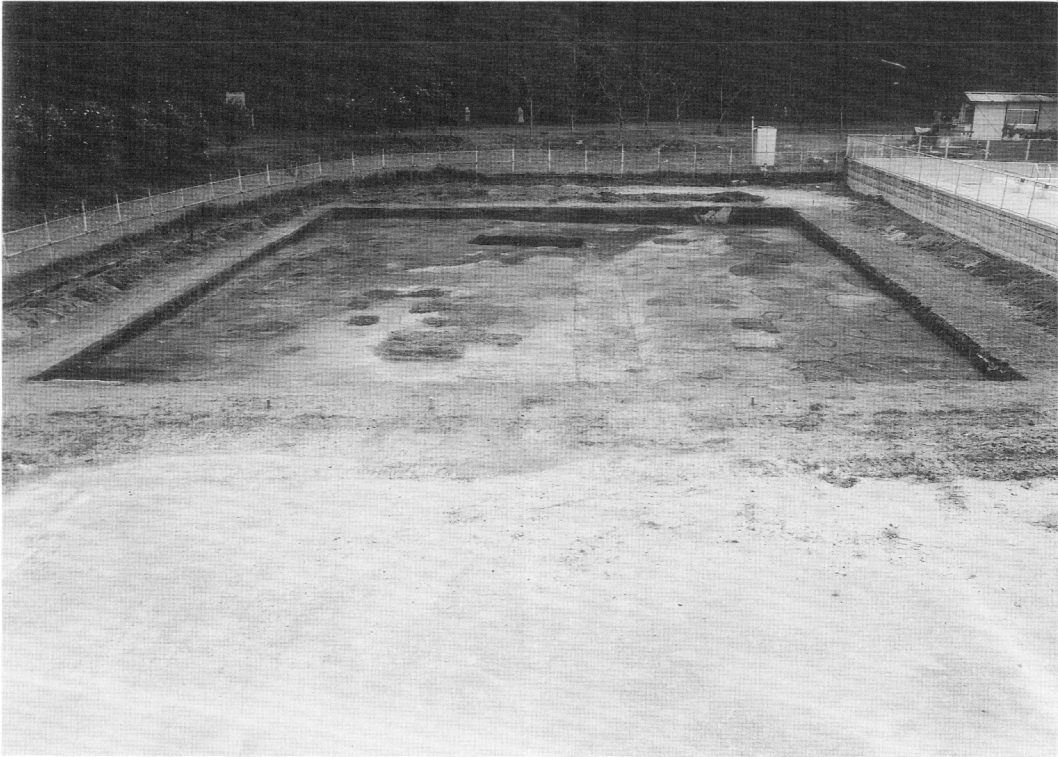
(1) 土器集中区出土状況（東から）



(2) 土器集中区須恵器出土状況（近景）



(3) 土器集中区土師器出土状況（近景）



(1) 第1遺構面検出状況（北から）



(2) 第1遺構面完掘状況（北から）

光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査

(7)



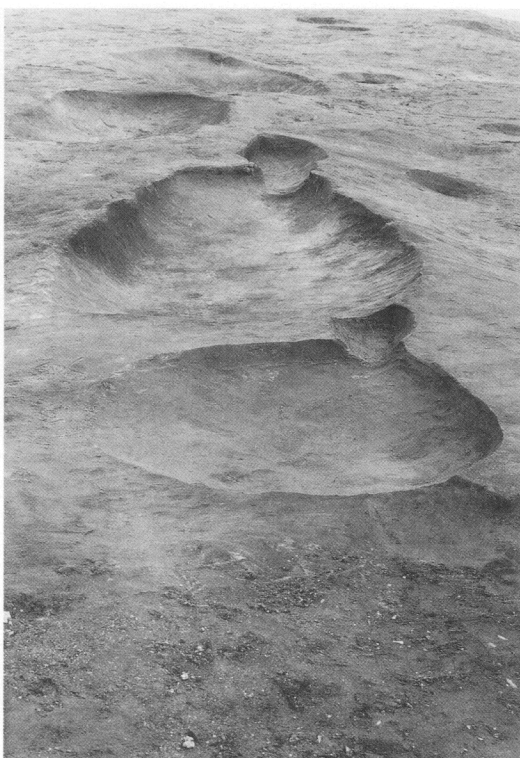
(1) 柱穴群完掘状況



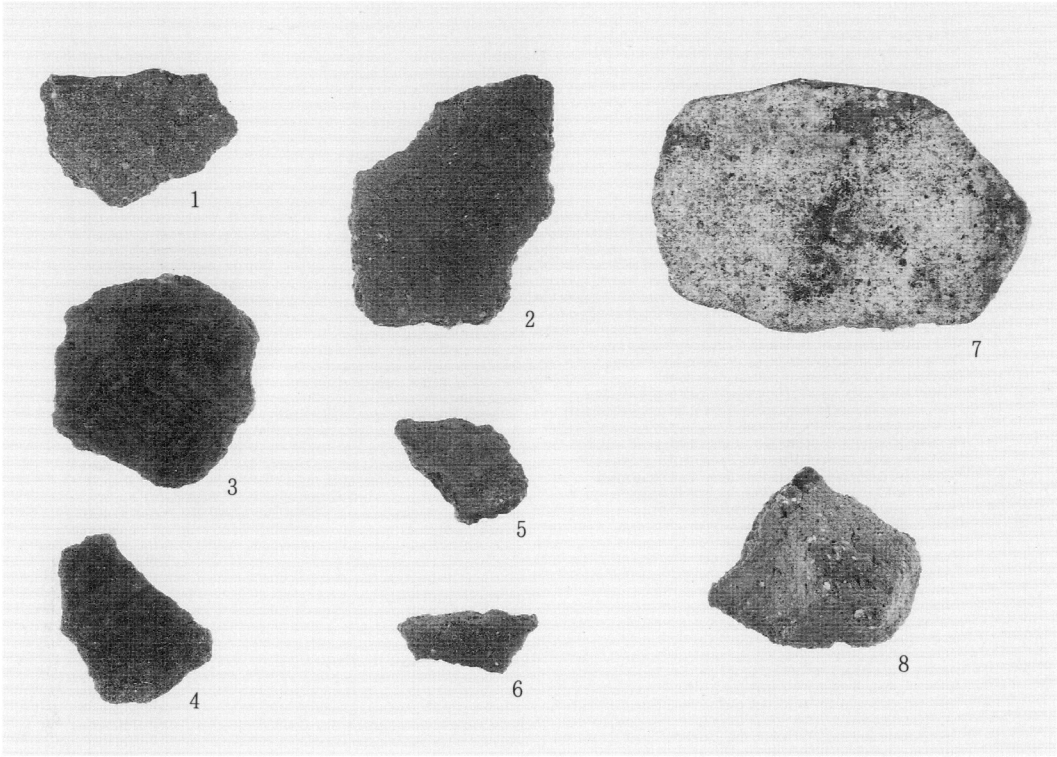
(2) 第1・2号土壙（北から）



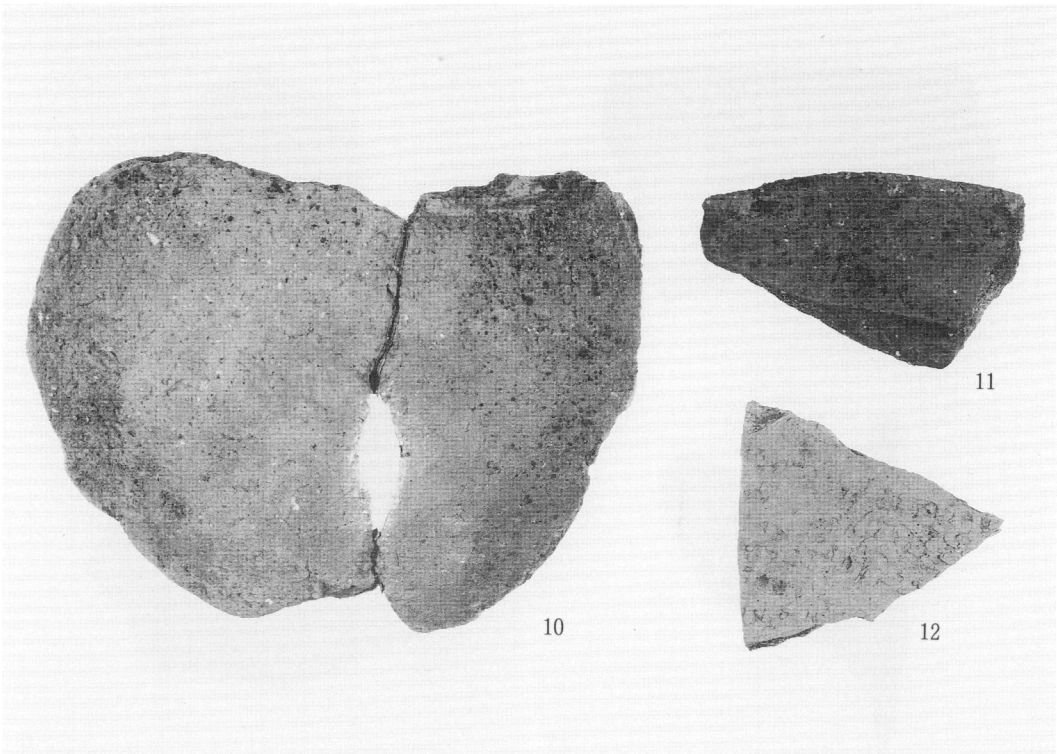
(3) 第3・4号土壙（北から）



(4) 第3・4号土壙（南から）

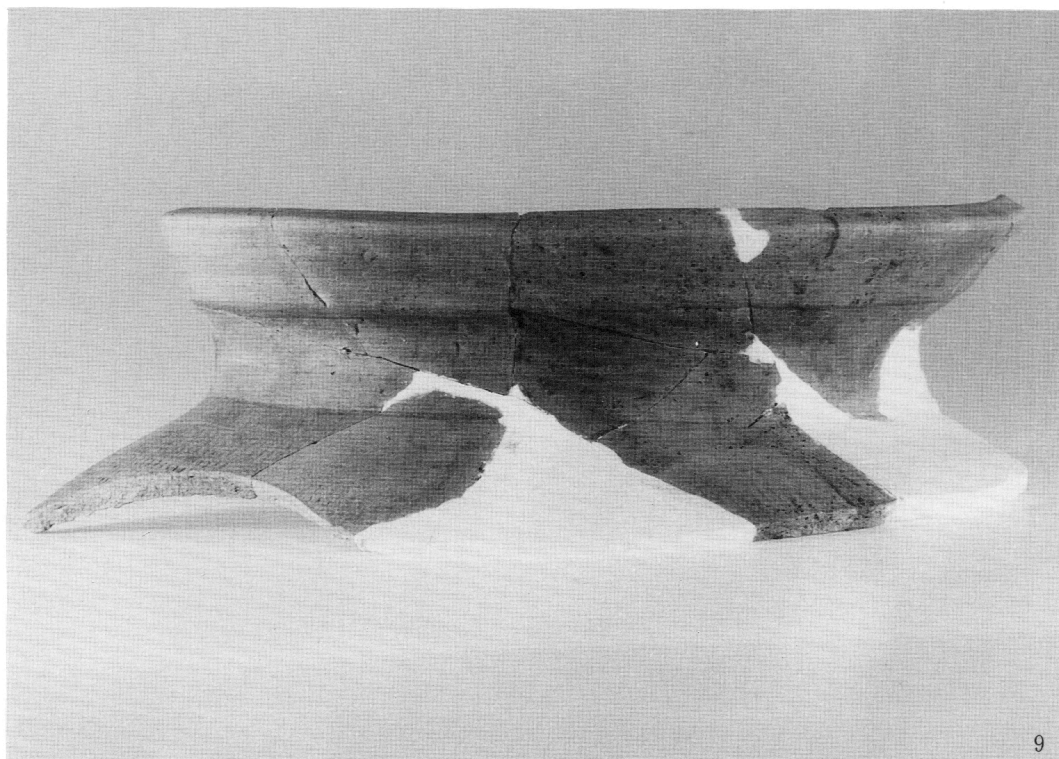


(1) 第22号土壙及び調査区出土縄文土器



(2) 第23号土壙及び土器集中区出土遺物

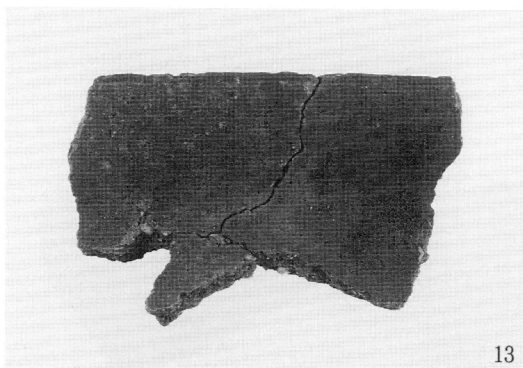
光
構
内
教
育
学
部
附
属
光
中
学
校
武
道
館
新
宮
に
伴
う
発
掘
調
査



9

(9)

(1) 土器集中区出土遺物



13



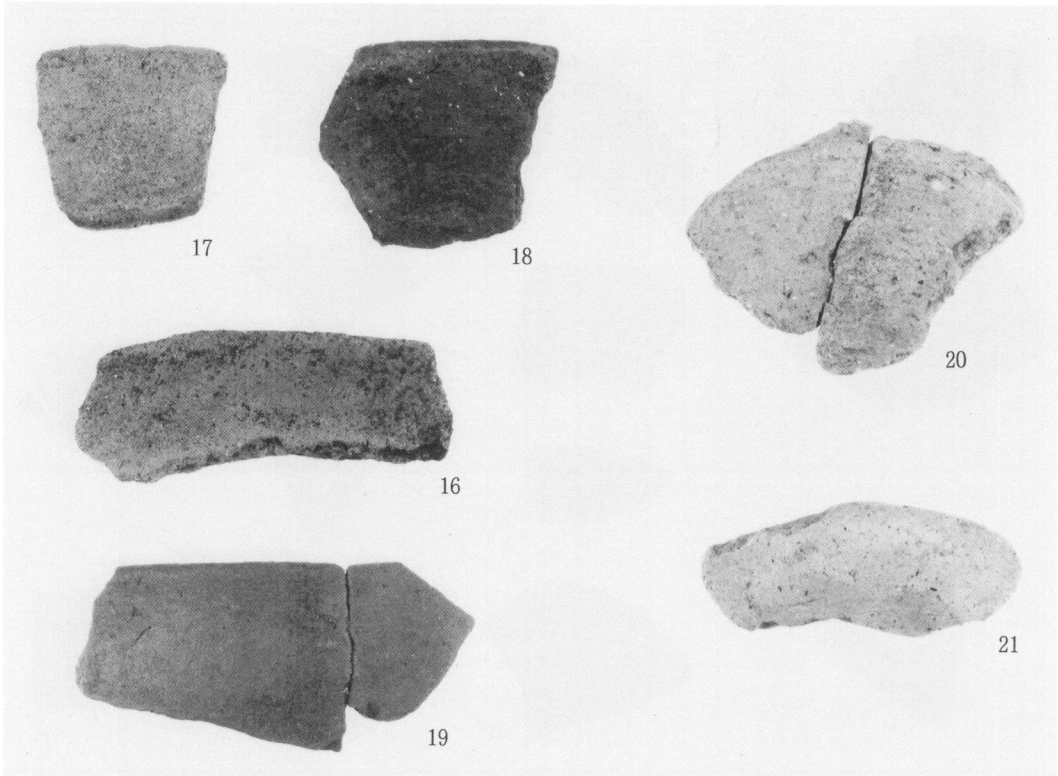
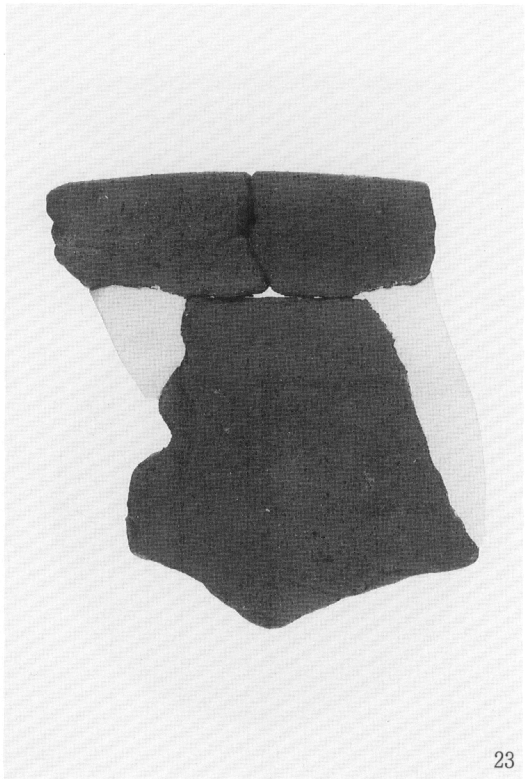
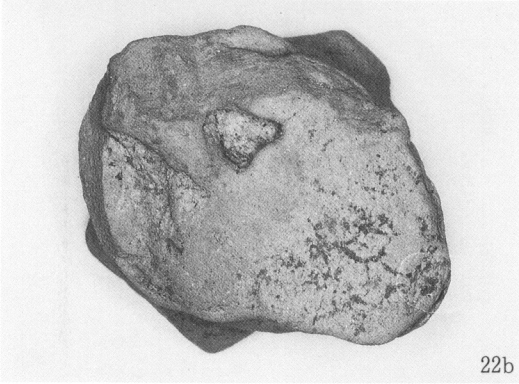
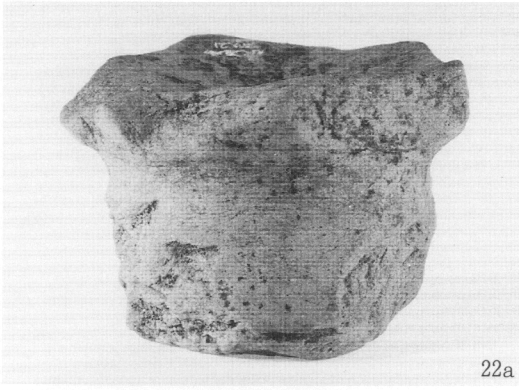
14

(2) 第24号土壙出土遺物



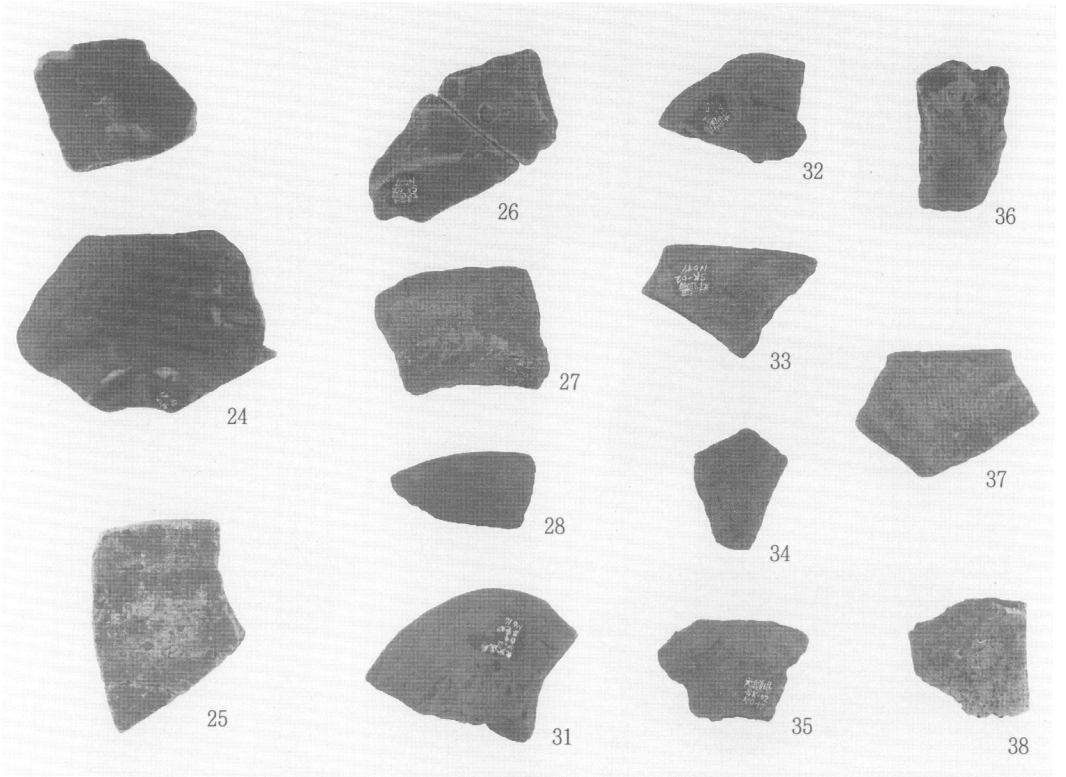
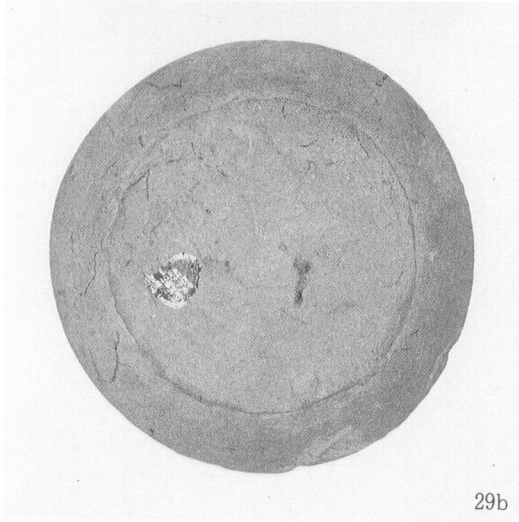
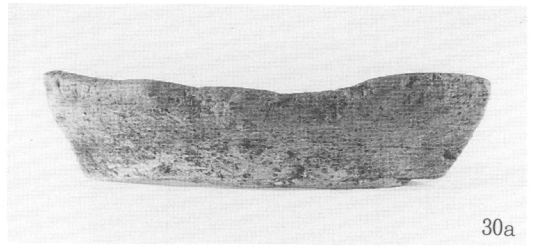
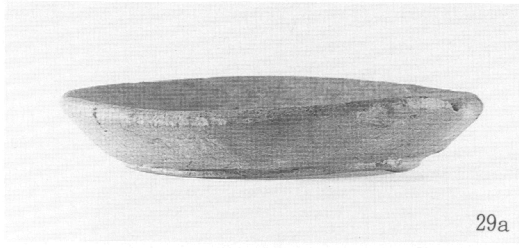
15

(2) 第VI層（包含層3）出土遺物



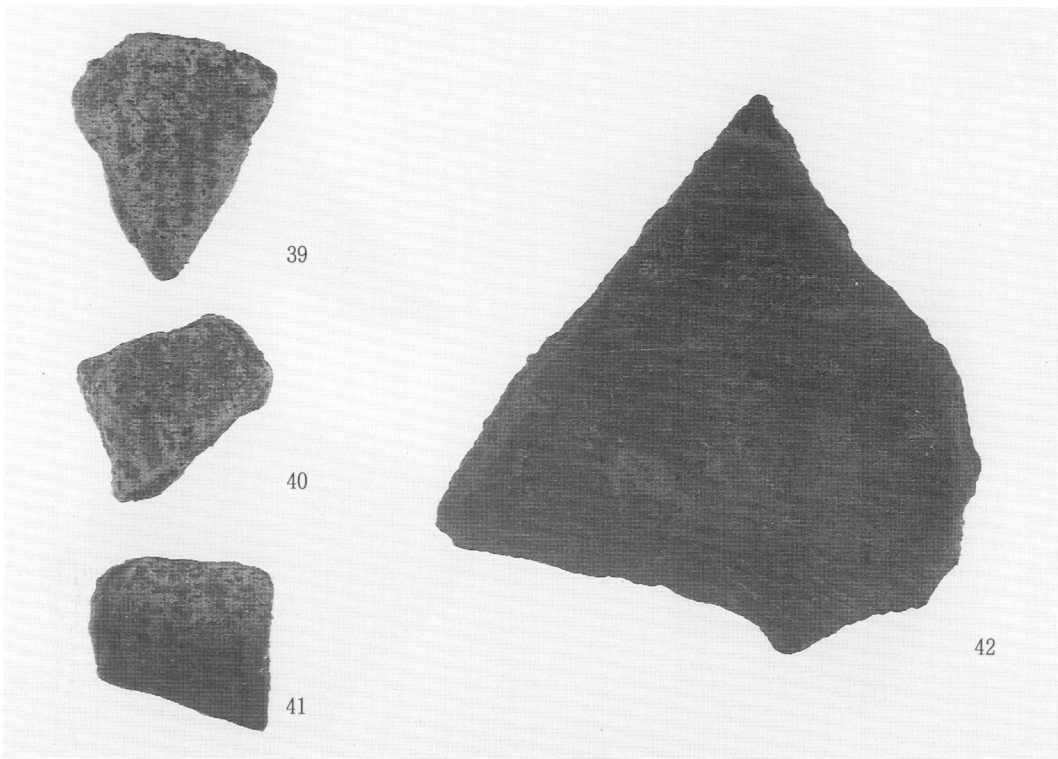
第VI層（包含層3）出土遺物

光構内教育学部附属光中学校武道館新宮に伴う発掘調査
(11)

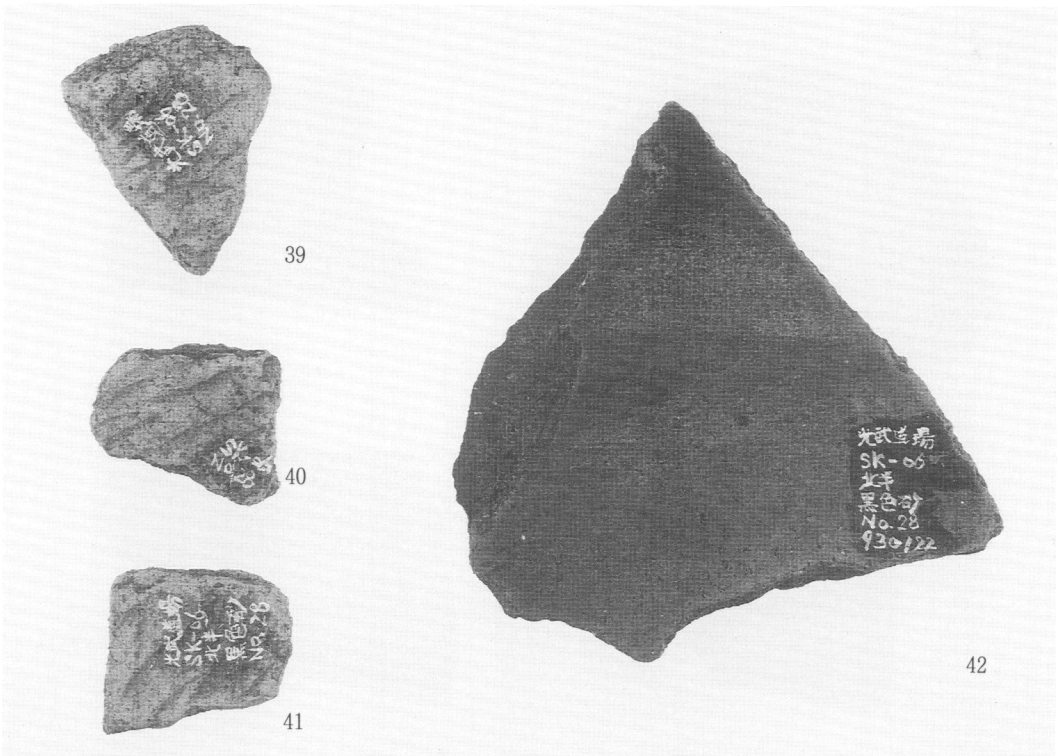


第1・2号土坑出土遺物

光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査 (12)



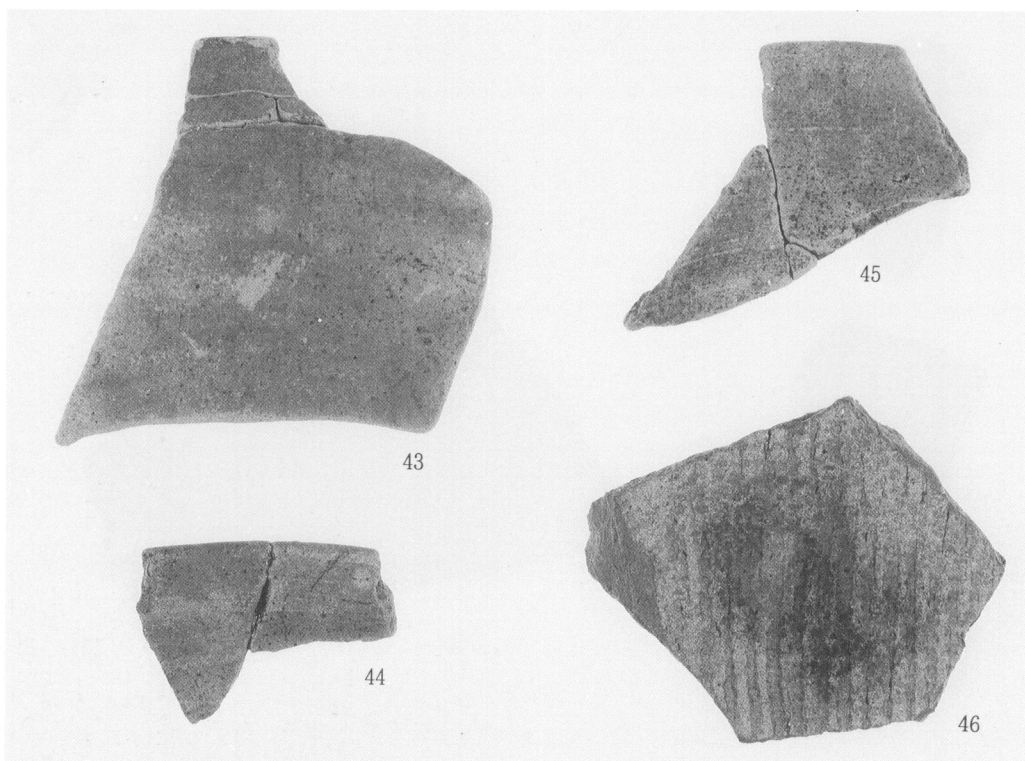
(表)



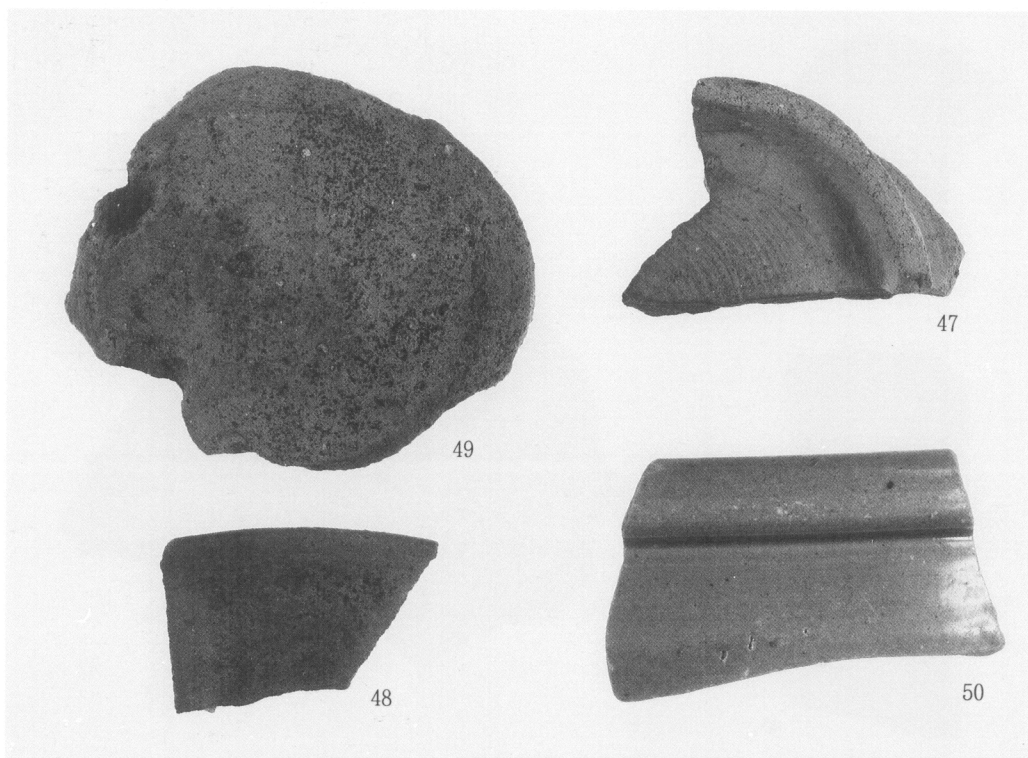
第3号土壙出土遺物

(裏)

光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査
(13)



(1) Pit-1・2 出土遺物



(2) 第IV層（包含層1）出土遺物及び御手洗湾採集遺物